

第6回「国際参加プロジェクト」報告書

A Report on the 6th 'International Participation Project'

2006年8月20日～31日
インドネシア共和国 北スマトラ州メダン市・ニアス島グヌンシトリ



地域文化研究センター

International Center for Regional Studies

天理大学

Tenri University

はじめに

第6回「国際参加プロジェクト」は2007年8月20日～31日の間、インドネシア共和国北スマトラ州メダン市とニアス島で行われました。本プロジェクトでは、2005年3月に地震で大きな被害を受けたニアス島の復興支援を目標としつつ、1つは天理大学が校舎を寄贈するモアウォ小学校を訪問し、校舎完成の手伝いをする事、もう1つは小学生を中心としたニアス島の人びとと交流することを主な活動目的としました。

本報告書はこのプロジェクトに参加した学生が中心となり、活動の総まとめとして、準備から現地での活動、そして帰国後の足取りを記したものです。お手に取ってご覧になっていただければ、参加学生一同、大変うれしく思います。

第6回「国際参加プロジェクト」参加学生

笑顔でつながる人と人





第6回「国際参加プロジェクト」

目次

はじめに			1
笑顔でつながる人と人			2
第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて			
学長	橋本 武人		7
歴史を刻み込むということ			
地域文化研究センター長	住原 則也		8
第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて			
後援会長	江川 嘉忠		10
「国際参加プロジェクト」への期待			
人間学部長	神田 秀雄		11
第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて			
文学部長	飯島 吉晴		12
第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて			
国際文化学部長			
天理大学ニアス島等復興支援委員会委員長	松尾 勇		13
第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて			
体育学部長	湯浅 晃		14
第6回「国際参加プロジェクト」参加者一覧表			15
第 I 部 活動報告			17
第6回「国際参加プロジェクト」の活動の経緯			19
第6回「国際参加プロジェクト」派遣前・帰国後の研修日程			20
事前研修			21
第6回「国際参加プロジェクト」日程			25
活動報告			26
コラム1 メダンの街はこんな感じ！？			31
コラム2 メダンでのホームステイ			32
コラム3 インドネシアは多民族国家！			33
コラム4 ニアス島とスマトラ沖地震			34
コラム5 次回へつなげて欲しいこと			40
コラム6 ニアスの町はこんな感じ！？			41
コラム7 ニアス島ウルルン滞在記			42

第Ⅱ部 感想文 ～One for all All for one～		44
Terima kasih banyak	国際文化・英米4年	青木 道裕 47
初めての海外訪問	人間・生涯教育3年	池崎 未幸 48
笑顔のパワー	国際文化・英米4年	内野 準子 50
伝えたい想い	国際文化・英米4年	大脇 千紘 51
たくさんの「出会い」にありがとう	国際文化・イスパニア2年	葛西 隆太郎 52
かけがえのない思い出	国際文化・英米4年	岸田 怜子 54
過ごして知ったインドネシアの今	国際文化・英米3年	佐賀木 昭子 55
「出会い」は明日へのパワーになる！	国際文化・ドイツ2年	佐藤 宮子 56
インドネシアが恋しい！	国際文化・英米2年	柴本 みなみ 59
学びっぱなし	人間・宗教2年	田中 初子 60
楽しかったインドネシア	国際文化・中国3年	中江 李栄 62
「仕合せ」	国際文化・英米2年	中小野 一八 63
インドネシアの2つの家族	国際文化・英米2年	中村 祐太郎 64
インドネシアで考えたこと	人間・宗教1年	中山 卓己 66
SENYEN～笑顔～	国際文化・中国3年	福西 穂高 67
インドネシアで学んだコト	国際文化・中国1年	前田 紗知 68

「インドネシアが大好きだー！！」			
	国際文化・英米2年	渡邊 麻子	70
海外ボランティアの難しさ			
	タイ語・インドネシア語コース事務助手	丸山 明笑	71
ニアス島、バンダ・アチェでの体験			
	副学長	大橋 正叔	73
2006夏・ニアスの思い出ー若者たちへのオマージュ			
	国際文化学部アジア学科主任	山本 春樹	74
救援活動に参加して			
	国際交流部長	谷口 忠三	75
再訪を期して			
	地域文化研究センター助教授	澤山 利広	76
改めて、感じて、学んで、そして、考えた12日間			
	地域文化研究センター講師	倉光 ミナ子	77
ニアス島等復興支援活動を振り返って			
	天理語学専門学校 22回生 インドネシア語	菊山 孝昭	79
ニアスの地に蒔かれた「絆」の種			
		高藤 洋子	80
My Opinion about Tenri University			
		Hendri N. Kuroiwa	82
私が選んだ写真			
	広報部	井上 久光	84
第Ⅲ部 資料編			85
インドネシア概要			87
募金活動			88
モアウォ小学校建設着工の経緯			89
小学生との絵の交換			90
インドネシア語講座			91
「心の友」との出会い			92
絵本『よろこびの種』			93
第6回「国際参加プロジェクト」に関する新聞記事			94
編集後記			98

第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

学長 橋本 武人

天理大学の「国際参加プロジェクト」は、建学の精神の一環として唱導する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001年大震災に見舞われたインド西部地区への災害救援活動として始められた。これが3年間続けられた後、2004年にはフィリピンへ、2005年には中華人民共和国へと活動の舞台を移して実施され、第6回を数える本年は地震と津波により大きな被害を蒙ったインドネシアのニアス島を中心に展開された。本書はその活動報告書である。

もともと災害救援として始まったとはいえ、このプログラムは義援金や援助物資を運び届ける類いのものでない。最初のインドでは、貯水のための河川堰建設や土囊のハウスの建築など、現地の人々が自立復興へ向けて必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色をもたせたもので、この基本姿勢は終始一貫している。

フィリピンでは恵まれない小学校の児童たちにリコーダーを贈呈して実際に演奏する技術を指導、中華人民共和国では砂漠化の危機に曝されている地域での植林活動に従事。この度は学生たちの街頭募金を元に、天理教国際たすけあいネットからの援助を得て、小学校の校舎を建築して寄贈するという事業を成し遂げたが、やはり参加した学生諸君が最後の仕上げ作業に汗を流すことと、ホームステイ先の家族たちとの交流を深めることに重点が置かれていた。

言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人々との共同作業、ホームステイ先の家族との直接的な交わりを通して、学生たちは国際性を養う上で多くのことを学び、現地の人々に喜んでいただく「他者への献身」を通して、人をたすける心という宗教的な心性の涵養も可能になる。また、貧しくとも純真で屈託のない子どもたちとの交わりは、何かにつけて恵まれている自己自身を省みる機会となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなる。

今はまだ渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、おいおい活動の範囲を世界の各地に広げて、一人でも多くの学生諸君が参加できるようにしていきたい。終わりに、この度の「国際参加プロジェクト」の計画実施に当たって、絶大なご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対して、深甚なる敬意と謝意を表します。

歴史を刻み込むということ

地域文化研究センター長
住原 則也

「国際参加プロジェクト」というのは、教育の場で、どのように国際協力・国際交流ができるのか、また、国際協力がどのように教育（知育・徳育・体育）に活かしているのかを、実践を通して学ぼうとする、本学を特徴づける一つの活動となっています。第1回目の開始は2001年であり、歴史はまだ浅いものですが、このようなプロジェクトを天理大学が行う理由は大学の創立時からの精神に根源を見出しうるものです。つまり橋本武人学長が常々仰る通り、本学の伝統である、「他者への献身」と言い換えることのできる宗教性と、もう一つは語学を身につけ海外に雄飛する国際性の双方を、このプロジェクトは併せ持っているからです。本学の伝統的精神の延長線上に位置しているものと言えます。

「国際参加プロジェクト」の始まりからの歴史を紐解けば、2001年1月26日インド・グジャラート州で大地震が発生したことを受け、同年8月1日から15日にかけて、井上昭夫おやさと研究所長をはじめとした有志の教員と学生が、被災地支援のためのチェックダムとボンガ（土嚢シェルター）などを造ったことが第1回目の活動です。次年度2002年4月に地域文化研究センター（井上昭夫教授が2002年4月から2006年3月まで初代センター長）が、プロジェクトを主幹する機関としてオープンし、第2回目（2003年3月5日～15日）の活動として、同じくインドで、チェックダムと図書館用のボンガ及び日本庭園などを増築しました。したがって、第2回目から、本センターがプロジェクトを主幹し始めたこととなります。更に第3回目（2004年2月21日～3月5日）もインドで前年度同様の活動を行っています。

第4回目は、場所を変え、1991年6月に500年ぶりの大噴火を起こしたフィリピンのピナツボ火山の被災地の小学校で、2004年8月4日～16日にかけて、リコーダーの指導などの活動を行っています。翌年の第5回目（2005年8月16日～27日）は、中国・陝西省において植林活動などに従事しています。

以上、第1回目から5回目までの、参加学生数は、のべ58名を数えています。

さて、6年目を迎えた今年度（2006年度）は、歴史の新しい1ページを付け加えることになりました。というのも、「国際参加プロジェクト」の2つの意味で新しい側面が付加されたからです。2つの新しい側面とは、1つは、今年度のプロジェクトが、例年のようなセンター独自の企画立案のみで実施されるのではなく、学内教職員と学生の有志によって立ち上げられた「ニアス島等復興支援委員会」からの要請を受ける形で行われたということです。つまり、2004年12月26日に起きたスマトラ沖大地震・津波

とそれに続く 2005 年 3 月のニアス島での更なる地震によって甚大なる被害を被ったインドネシアやタイなど、本学にゆかり深い地域への支援の気運が学内に沸き上がったことが、今年度のプロジェクトに特別の色合いを付けることになったわけです。参加希望学生も例年以上に多く、2 度の審査の結果、17 名の学生が参加することになりました。

もう 1 つの新しい動きは、社会学協働事業としての推進です。プロジェクトが、教育の一環である、という位置づけに変わりはないとしても、国際協力・交流活動が、大学構成員のみで行われるより、大学の立地するコミュニティーへの面としての広がりを持つことで、地域の一員としての大学の位置づけを明確化し、参加学生も、技術や知識や責任感を持った地域の社会人と活動を共にすることで、より多角的な学習ができるものと考えます。そのような活動を行う好適な場所として、天理教の海外拠点もあるフィリピンが選ばれ、「フィリピン・プロジェクト 06」と命名されて、2 名の社会人と 9 名の学生の参加により、企画通り立派に活動を終了することができました。次年度以降も継続予定です。「フィリピン・プロジェクト」の、これから続く歴史の最初のページが記された年と言えるでしょう。

そもそも、本センターが推進する「国際参加プロジェクト」とは、出かけてゆく現地での 2 週間足らずの活動だけを指すのではなく、事前の研修と、帰国後の記録のまとめ、という一連の全工程を指しています。事前研修では、週一度ペースで約 10 週間かけて準備を行います。帰国後は、また何週間もかけて記録文集を作成することで、活動の成果を振り返ることになります。単に、活動の記録を残すのではなく、歴史を刻み込んでいくものと理解しています。私は、プロジェクトの全工程（事前研修、現地活動、記録文集）を三段跳びになぞらえて、ホップ・ステップ・ジャンプと呼んでいます。三段まで飛びきること、参加学生が卒業後社会人として活躍するときになっても、このプロジェクトで学んだことが長く活かされるものと信じています。

「国際参加プロジェクト」は全学に開かれた活動であり、本センターの一存や、センターメンバーだけで推進できているものではありません。全学からのご協力・ご理解をいただいて初めて実現できるものであることは言うまでもありません。学内のこれまでの幾多の教職員の方々の暖かいご協力にこの場を借りまして、厚く感謝申し上げます。また今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

末尾になりましたが、学内だけではなく、後援会からも多大なご理解・ご支援をいただいていますこと、あらためて厚くお礼申し上げます。

第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

後援会長 江川 嘉忠

ここ数年、自然による猛威は地球上を駆け巡り、特に経済的・社会的な弱者が多い発展途上地域での被害は甚大なものとなっている。このような自然災害に対する国際社会の援助の手もかつてないほど迅速に、そして、大規模で展開するような様相を、私たちはテレビで目の当たりにしている。もちろん、こうした被害からの復興には多大な資金ばかりではなく、長い時間がかかることが予想される。しかし、世界のどこかで、あまりに多くの問題が日々勃発しているためか、数ヵ月もたつとこうした被害地への支援は忘れがちになってしまうことも多々あるだろう。

天理大学地域文化研究センターにおける「国際参加プロジェクト」は、本年度で第6回目を数え、その多くが自然災害による被災地への支援を目的としている。今年は、2004年の年末に発生したスマトラ沖大地震による津波の被災地への支援を行ったという。スマトラ沖大地震は発生当時こそ、日本のメディアでも頻繁に取り上げられたが、最近あまり耳にすることはない。しかし、「国際参加プロジェクト」を通して、まだ支援を必要としている人たちがいることを改めて知ることができる。また、今年プロジェクトは単なるセンターだけの活動ではなく、天理大学国際文化学部アジア学科インドネシア語コース・タイ語コースの教員・学生を中心に始められた支援活動と連動していると聞いている。参加学生は、津波の被災地としてはあまり日本のメディアでは注目を浴びていなかったニアス島へ赴き、どのような活動を行ったのか、きっと、個人個人に感じ入ることがあったに違いない。

第二次世界大戦後の日本は経済的な発展をとげ、今の大学生は豊かな生活を享受している。しかし、その一方で、日本の社会は、小・中学校で深刻化してきたいじめの問題に見られるように、人と人が人間的な関係を育んでいくのが難しくなっているようにすら感じる。このような日本から海外に飛び立つ学生たちは、仲間たちと力を合わせて、ボランティア活動に従事していく中で、きっと大学の講義だけでは得られないすばらしい人とのつながりを発見できるに違いない。また、彼らは、異国の地で、日本とは異なる文化や人間のつながりを経験することで、人間として大きく成長していくのではないかと期待ができる。今後も、後援会は、天理大学の学生たちが単なる海外旅行では得られない体験をできるような機会をできる限り支援していきたいと願っている。

「国際参加プロジェクト」への期待

人間学部長 神田 秀雄

2004年12月のスマトラ島沖地震によって引き起こされた津波の被害が、インドネシア、タイ、スリランカなど、インド洋沿岸諸国に甚大な被害をもたらしたことは記憶に新しい。翌年早々、アジア学科のインドネシア語コースとタイ語コースの学生諸君が街頭募金をはじめたのを機に、本学には「ニアス島等復興支援委員会」が組織され、学生・教職員による復興支援活動が展開されることになった。これまで本学では、インド西部地震の復興支援活動や、中国での植林活動、フィリピンでの奉仕活動などの形で「国際参加プロジェクト」を展開してきたが、第6回を迎えた2006年は、全世界の眼が注がれた大災害の復興支援に参加した点で、プロジェクトがいよいよ本格的なものになったと言える。

21世紀の国際社会では、国家間の対立抗争がまったく新しい段階を迎えている。そのため、これからの世界では、政治・経済的な国際関係が急速に進むことよりも、むしろ1人ひとりの人間が相互に交流し意思疎通を深めてゆくことの方が、大きく期待されていると言ってもよいであろう。また20世紀末以来、日本社会はさまざまな場面で行き詰まりに直面しており、今日のわれわれには、より広い視野からあらためて自らを見つめ直すことが求められてもいる。そうした中で、本学の学生・教職員が「国際参加プロジェクト」に参加することには、おそらく2つの意義があると言えよう。つまりその1つは、このプロジェクトが、建学の精神のキーワード「他者への献身」を具現化するものであることで、このプロジェクトは、国内的な日常生活の中では実践しにくくなっている面もある「他者への献身」の機会を、具体的かつ確実に与えてくれるものだということである。またもう1つは、このプロジェクトが、世界の現実に直接的にふれるチャンスを参加者に与えてくれることで、参加者がそこから何を得ているかは、この報告書にくわしく述べられていると思う。

本学の「国際参加プロジェクト」が学部を超えた全学的な取り組みとして発展していくことを心から期待し、人間学部としても可能なかぎり協力していきたいと思っている。

第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

文学部長 飯島 吉晴

「国際参加プロジェクト」は、「他者への献身」という建学の精神を国際的な場において実践するという教育プログラムで、地域文化研究センターが中心となって全学の学生対象に実施してきた。今夏の活動はその第6回目に当り、急遽実施が決まった「フィリピン・プロジェクト06」に引き続いて、インドネシアのニアス島等で実施され、2004年のスマトラ沖地震で多大な被害を受けたニアス島のモアウォ小学校に校舎を贈呈するなど大きな成果をあげて全員無事に帰国し、今回その活動報告書が刊行される運びになったことは喜びにたえない。今回の活動では、主に校舎の仕上げ段階でのペンキ塗りや花壇造りのほか、地元の小学生との交流、スマトラ島メダンでの孤児院訪問、北スマトラ大学の学生との交流やコーヒー工場の見学などが実施され、目に見えない多くの財産が参加学生のところに築かれたことと思われる。

本学では、常日頃からひのきしんデーなどの活動を通じて、建学の精神を実践してきており、学会等の開催での学生の献身的な奉仕活動は他大学の関係者から注目され、ほめられることが少なくない。

養老孟司氏は『まともな人』（中公新書）のなかで、「座って机の前で学べることもたしかにある。しかし応用が利くということは『身についた』ことでしかありえない。教養教育がダメになったのも『身につく』ことがないからであろう。教養はまさに身につくもので、座って勉強しても教養にはならない。ただ勉強家になるだけである。（中略）なぜ身につかないか、それははっきりしている。情報化時代だからであろう。情報とは停まったもので、生きて動いている存在ではない。（中略）生きることは、再び取り返しがつかない時間を通過することである。通過していく主体は、二度と同一の状態をとることはない。だからすべては一期一会なのである」と述べている。

この頃はあまり聞かなくなかったが、「かわいい子には旅をさせろ」という諺がある。これはある意味で教育の核心をついている言葉ではないかと思われる。現在は、日本中どこへいっても都市化が進行し、昔に比べて生活もずっと豊かになり、明日食べる米がないといった半世紀あまり前には現実であった貧困は想像できなくなっている。その豊かさの代償として、自分の身体や全感覚をとぎすませて絶えず変化し動いている自然や現実世界と向き合うという経験は圧倒的に少なくなっている。現在の情報化社会とはまさしくこういった社会のことであり、学問はこの変化しない停まったものを整理する作業にほかならないのである。養老氏によれば、情報化社会の人が教育が下得手なのは当然であり、「教育とはまさに生きて動いていく人間を扱うことだからである。子ども以上に変化の激しい人間はない」という。さらに、「いま教育問題がやかましい。（中略）教育の根本はなにかというなら、話は簡単である。水と餌とねぐら、それを自分で探すようにさせる。そうすれば、アツという間に子どもは育つ」という。一定の豊かさを達成し、何事も安全第一となった現代社会では、教育の動機やインセンティブがなかなか見つけにくくなっている。ところが、無気力であった若者たちも、海外でのボランティア活動など自分が必要とされ、自分が人々の役に立つ存在であることに目覚めると、人が変わったかのような頼もしい存在に変身することが少なくない。いわば、「国際参加プロジェクト」はその契機であり、現代版の「かわいい子には旅をさせろ」という諺なのである。

第6回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

国際文化学部長・天理大学ニアス島等復興支援委員会委員長
松尾 勇

今夏実施されました第6回「国際参加プロジェクト」ならびに「フィリピン・プロジェクト 06」が大きな成果を挙げて無事終了いたしましたことは、私たち天理大学にとってこの上ない喜びです。その間、両プロジェクト推進のための研修の企画・実施や参加者への指導に直接ご尽力くださいました教職員の方々には深甚なる謝意を表したいと存じます。

プロジェクト参加を通して学生の皆さんは、まことに得がたい貴重な経験をされました。現地へ赴き、現地の方々と交流することにより、国際協力や国際貢献ということに対して具体的なイメージを持つことができたのではないかと拝察いたします。ともに悲しみ、ともに喜ぶというとても大切な生き方の基礎を身につけられたことでしょう。

2004年12月のインド洋大津波と2005年3月のニアス島大地震に起きた自然の猛威の前で私たちはただ呆然と立ちすくむしかありませんでした。そのような状況の中で、わがインドネシア語コースとタイ語コースに所属する教員と学生が中心となっていち早く被災地の復興支援のために立ち上がりました。最愛の肉親を亡くすなど、想像を絶する被害を受けた現地の方々の心の痛みをわが心の痛みとして、寒風の吹きすさぶ中、また、酷暑の中を教職員・学生たちは街頭募金活動をいたしました。その輪が次第に広がり、多くの方々の真実をいただいて、復興支援に寄与することができました。街頭募金に協力してくださった数多くの方々をはじめ、天理大学の卒業生の方々、天理教国際たすけあいネット、天理大学教職員、その他大勢の方々から尊い寄付を賜りました。まことにありがとうございました。心より御礼申し上げます。

当初の計画が順調に進んだ今、今後の継続的支援こそが大切であります。2006年11月30日には、インドネシアのアチェよりルトフィー・アウニ氏を、メダンよりヨピ・マナル氏のお二方をお招きして国際シンポジウム「災害被災地復興支援活動と大学教育」を開催いたしました。これによって私たちは現地の状況に対する理解をさらに深めることができました。シンポジウムは、今後の計画をより確かなものとする契機となるとともに、天理大学が取り組んでおります国際協力プログラムのより一層の推進につながるものになることと確信いたします。

第6回「国際参加プロジェクト」報告書の刊行に寄せて

体育学部長 湯浅 晃

本年度、地域文化研究センターが企画されましたインドネシアならびにフィリピンへの2回の「国際参加プロジェクト」が成功裡の内に無事終えられましたことを、先ずもってお祝い申し上げます。また、プロジェクトの企画・立案から現地での活動、学生指導の全般にわたってご尽力をされたセンター長をはじめ、センター員、法人職員の方々に衷心より敬意を表します。

人類の共存・共栄の必要性が叫ばれて久しいにもかかわらず、現在でも国家間、民族間の争いが絶えません。また、国内においても親が子を殺し、子が親を殺すという殺伐たる状況が益々深刻さを増しています。本学は、「他者への献身」の心を核とした「天理スピリット」の体得を最も重要な教育目標として掲げています。「他者への献身」の心や態度は、私達が日々の生活する中で日常的に醸成されるべきものだと思います。しかしながら、本学の学生や教職員に対して、その大切さをアピールし浸透させるには本プロジェクトのような大学をあげての活動が必要であると思います。参加学生の感想文の一部を拝見させていただきましたが、それぞれの学生が見知らぬ国へ出向き、不安を抱えながらも懸命に活動し、さわやかな達成感をもって帰国した様子がよくわかりました。この経験は、学生達にとってかけがえのない思い出になるとともに、これからの人生の指針となり「天理スピリット」のすばらしさを社会に向けて発信してくれるものと思います。

今回のプロジェクトは、インドネシアにおいては地震災害の復興支援、またフィリピンにおいては現地の子どもたちとの交流が主な活動内容であったと報告されております。そして2回のプロジェクトに、合わせて28名の本学学生が参加したと聞いております。私ども体育学部の学生は、これまでこの「国際参加プロジェクト」に数名が参加したにすぎません。体育学部の学生達は、ただ競技に勝つことだけを目標としている学生が多く、スポーツを通して人々と交流し、その中で新たな自己を発見し、自己を高めていくという姿勢が稀薄だと思っています。今後、スポーツや武道を介した国際交流をメインとするプロジェクトを、学部と地域文化研究センターとが協力して企画できれば、天理大学にまた一つの花が咲くのではないのでしょうか。

第6回「国際参加プロジェクト」参加者一覧表

■教員

- | | | |
|---|--------|--------------------------|
| 1 | 大橋 正叔 | 副学長 |
| 2 | 住原 則也 | 地域文化研究センター長 |
| 3 | 山本 春樹 | 国際文化学部教授、地域文化研究センター兼任研究員 |
| 4 | 澤山 利広 | 地域文化研究センター助教授 |
| 5 | 倉光 ミナ子 | 地域文化研究センター講師 |

■職員

- | | | |
|---|-------|-------------------------------|
| 1 | 谷口 忠三 | 国際交流部部长 |
| 2 | 井上 久光 | 広報部 |
| 3 | 丸山 明笑 | 国際文化学部アジア学科タイ語・インドネシア語コース事務助手 |

■学生

- | | | |
|----|--------|-------------------------------|
| 1 | 青木 道裕 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース4年 |
| 2 | 池崎 未幸 | 人間学部人間関係学科生涯教育専攻3年 |
| 3 | 内野 準子 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース4年 |
| 4 | 大脇 千紘 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース4年 |
| 5 | 葛西 隆太郎 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科イスパニア語コース2年 |
| 6 | 岸田 怜子 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース4年 |
| 7 | 佐賀木 昭子 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース3年 |
| 8 | 佐藤 宮子 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ドイツ語コース2年 |
| 9 | 柴本 みなみ | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース2年 |
| 10 | 田中 初子 | 人間学部宗教学科2年 |
| 11 | 中江 李栄 | 国際文化学部アジア学科中国語コース3年 |
| 12 | 中小野 一八 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース2年 |
| 13 | 中村 祐太郎 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース2年 |
| 14 | 中山 卓己 | 人間学部宗教学科1年 |
| 15 | 福西 穂高 | 国際文化学部アジア学科中国語コース3年 |
| 16 | 前田 紗知 | 国際文化学部アジア学科1年 |
| 17 | 渡邊 麻子 | 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース2年 |

第 I 部
活動報告

第6回「国際参加プロジェクト」の活動の経緯

私たちの「国際参加プロジェクト」は2004年12月末～2005年3月にインドネシア共和国・スマトラ島周辺で発生した地震と津波の被害に対して、何か支援をしようとした大学全体の活動の一部として行われました。

【活動の経緯】

2004年	12月26日	スマトラ沖地震によるインド洋大津波 発生
2005年	1月	国際文化学部アジア学科タイ語コース・インドネシア語コース学生等による街頭募金開始
	3月28日	ニアス島大地震 発生
	10月6日	天理大学ニアス島等復興支援委員会 発足 これ以降、ふるさと会も含めた街頭募金活動を展開
	12月末	地域文化研究センタースタッフによるメダン・ニアス島の視察 これにより、プロジェクトの実施を決定。
2006年	3月末	第6回「国際参加プロジェクト」(以下、プロジェクト)募集開始
	5月15日	プロジェクト参加者募集締め切り
	5月23日	ニアス島等復興支援委員会にて、ニアス島モアウォ小学校の校舎建設着工決定
	5月29日	プロジェクト事前研修開始
	6月24日	JICA大阪での宿泊研修
	8月19日	プロジェクト結団式
	8月20日	インドネシアにて、プロジェクトの実施(～8月31日)
	9月25日	帰国後研修開始

第I部では、2006年5月末以降の私たちの活動にそって、その内容を紹介します。

第6回「国際参加プロジェクト」派遣前・帰国後の研修日程

日にち	研修時間	研修内容
5月29日(月)	18:00～19:30	＊オリエンテーション ・センター長挨拶 (住原先生) ・インドネシア紹介 (山本先生) ・事業説明 (澤山先生) 研修や活動に関する注意事項 ・参加者の顔合わせ 自己紹介、連絡網(メーリングリスト)の作成
6月5日(月)	18:00～19:00 19:10～20:00	・インドネシア語会話1 ・スマトラ沖津波のDVD鑑賞
6月12日(月)	18:00～19:20 19:30～20:00	・インドネシア語会話2 ・ミーティング 班分けおよび役割分担の決定
6月19日(月)	18:00～19:20 19:30～20:00	・インドネシア語会話3 ・報告書の作成について 記録の分担の決定
6月24日(土) 25日(日)		＊宿泊研修 (JICA大阪でセミナーに参加) 「我々にできる自然災害被害地支援」
6月26日(月)	18:00～19:20 19:30～20:00	・インドネシア語会話4 ・交流活動準備1
7月3日(月)	16:30～18:00 18:15～19:20 19:30～20:00	＊特別講習：海外での健康管理について (医務室：大森さん・近藤先生) ・インドネシア語会話5 ・交流活動準備2
7月10日(月)	18:00～19:00 19:10～20:00	・インドネシア語での自己紹介披露 ・交流活動準備3
8月19日(土)	15:00 16:00～	＊結団式 最終打ち合わせ 打ち合わせが終わり次第、順次解散
9月25日(月)	16:30～19:00	＊報告書作成の打ち合わせ ・記録担当と個人感想文提出(締め切り厳守) ・今後の日程の打ち合わせ 写真の交換会

【事前研修】

インドネシア語研修



↑これはメイディさんのクラスです。

6月の初めから、毎週月曜日の6時限目に、インドネシアのパジャジャラン大学からの短期留学生のモハメッド・イクバル君とメイディ・インダさんからインドネシア語を丁寧に、そして楽しく学びました。内容は簡単な挨拶や基本的な文法です。また、言葉以外にも、食事やお風呂といった日常生活についても教えてくれたので、私たちは大助かりでした！みんな、現地の人と話がしたい一心でがんばりました。毎回少しずつ話せるようになり、改めて語学を学ぶ楽しさを感じました。

クレヨン詰め

子どもたちにプレゼントするために、クレヨンを1つ1つ丁寧に小さな袋に分ける作業を行いました。これらのクレヨンは、2004年に和歌山県でクレヨン工場を営んでいた山下ご夫妻が亡くなられたので、その娘である宮本裕美さんが残ったクレヨンを寄付してくださったものです。その方たちの思いもこめて、子どもたちに届けさせていただくことにしました。



↑気が遠くなりそうな袋詰め…。



↑個性があふれる素敵なカードが完成!!

Terima Kasih カードの製作

ホストファミリーへの御礼として、手作り感があふれる飛び出しカードを作りました。それぞれに工夫して、和紙などで飾りつけて、覚えてのインドネシア語で一生懸命メッセージを書きました。お金がかかっている物より喜んでもらえるのではないかと思います。これをお別れのときにお世話になったホストファミリーに渡すことにしました。

6月24・25日

JICA宿泊研修

JICAとは：「Japan International Cooperation Agency」の略で、正式名称は「独立行政法人 国際協力機構」、政府開発援助の実施機関の一つです。途上国の「紛争」、「貧困」、「環境悪化」、「人口増加」、「食糧不足」、「教育格差」、「ジェンダー（社会的性差）」など、さまざまな問題について、特に「技術協力」を担い、地球規模の課題に取り組んでいます。また、その一つとして、青年海外協力隊の派遣を行っています (<http://www.jica.go.jp/Index-j.html>)。

1. スマトラ沖地震について

スマトラ沖地震について、専門家の先生や実際現場に行かれた先生方のお話を聞きました。みんな真剣にメモを取り、これから行くインドネシアについての知識をしっかり身につけようとしていました。



2. 貿易ゲーム

神戸学院大学の学生さんと大阪府立老人総合センター・シニアアドバイザー養成講座の方々と一緒に、1グループを1つの国に例え、貿易をするというゲームをしました。どのようにすれば、自国が経済的に発展するのか、みんな試行錯誤の連続でした。

3. JAPAN BOX

日本を紹介するとき、何をどのように紹介したらよいかを学びました。「見る・聞く・触わる」の感覚を使えるような文化の紹介の仕方が一番よい方法だと思いました。

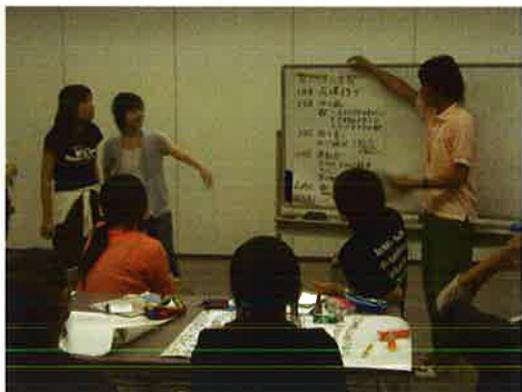
4. Mr. Lalemba Tsehaye のお話

外国語に慣れ、感覚を身につけるため、エリトリアの方に英語でお話を聞きました。自分のいる日本では考えられない内戦の話聞き、もっと世界のことを知り、自分たちにできる事を考えていかななくてはならないと感じました。



5. ミーティング

交流案の発表・検討がなされ、みんな真剣に取り組みました。JICAの方にもアドバイスを頂き、よい勉強となりました。



ソーランの練習



↑地域文化研究センター共同研究室にて。

Tシャツ作り

私たちはソーランを踊るときに着るために、「絆」という文字を入れたTシャツを製作しました。実際に、作ってみるとTシャツにインクがうまく移らなかったり、水ですぐ消えてしまったりと大変でした。しかし、後ろに一人一人の名前を入れていくとだんだんと味がでてきて、素敵な手作りTシャツになりました。

ニアス島で予定されている式典において、どんなダンスを踊るかを決めました。最初は、マツケンサンバや盆踊りが候補に上がっていましたが、最終的にソーラン節になりました。研修時の練習はみんなでおやさと高校からお借りしたビデオを見ながら練習しました。なかなか人数がそろわず、悪戦苦闘しましたが、現地の人に喜んでもらおうという気持ちで何とか完成させました。これを通して、皆で心をあわせ、「一手一つ」になれた事を感じることができました。



↑インドネシアからの留学生のイクバル君も一生懸命漢字を書いてくれました。

食事会



↑料理に喜ぶ学生たち!!

事前研修の最終日は「フィリピン・プロジェクト06」の参加者と一緒にみんなで食事をしました。センター長の住原先生御夫妻がおいしいインドネシアの料理を差し入れてくださいました。料理は想像よりかなり辛かったです。研修成果の発表として、それぞれにインドネシア語で自己紹介を行いました。こうして、私たちは、すべての事前研修を終えました。

8月19日

結団式

ついに「国際参加プロジェクト」の開始を明日に控え、参加メンバー全員が集まり、それぞれに決意表明をしました。学長先生をはじめ、副学長先生、国際交流部長谷口先生から温かい激励のお言葉をいただきました。「明日から始まるんだな」とすごく実感しました。最後に、全員で天理教の神殿に足を運ばせていただきました。緊張や不安、楽しみなど、さまざまな気持ちの中に、このプロジェクトの目的であるニアス島モアウォ小学校の完成を成功させるのだと、メンバーみんなで改めて認識することができた一日でした。



プロジェクト・サイト



第6回「国際参加プロジェクト」日程

日 時	内 容	日 時	内 容
8/20(日) 11:00 16:35 19:20 19:45	日本（関西空港）発 シンガポール着 シンガポール発 メダン着 【宿泊：ホテル】	8/26(土) 午前 午後	小学生との交流 花壇造り・校舎建設手伝い 【宿泊：HS】
8/21(月) 午前 12:00 15:00	無償資金プロジェクト 孤児院視察 在メダン日本国総領事館公 邸表敬訪問 ホームステイ (HS) 先との顔 合わせ →各自ホームステイ先へ 【宿泊：HS】	8/27(日) 午前 午後	自由行動 花壇造り・校舎建設手伝い 【宿泊：HS】
8/22(火) 午前 昼食 午後	北スマトラ大学訪問・交流 北スマトラ大学食堂 【宿泊：HS】	8/28(月)	校舎の完成式 【宿泊：HS】
8/23(水) 午前 昼食	コーヒー加工工場での見学 メダン市内 【宿泊：HS】	8/29(火) 午前 午後	グヌンシトリ発→メダン着 【宿泊：ホテル】
8/24(木) 午前中 昼食 午後	メダン発→グヌンシトリ着 教育局訪問 モアウォ小学校訪問 →ホームステイ先へ 【宿泊：HS】	8/30(水) 12:00 午後 20:35 23:00	メダンホストファミリーと さよならパーティー 自由行動 メダン発 シンガポール着
8/25(金) 午前 午後	小学生との交流 花壇造り・校舎建設手伝い 【宿泊：HS】	8/31(木) 01:10 08:35	シンガポール発 日本（関西国際空港）着 解散 →天大バスで大学に移動

【活動報告】

8月20日 ついに、インドネシアに出発!!!!

待ちに待ったインドネシアに出発する日がきました。心配した遅刻者は一人もなく、みんなの胸が高まる中、関西国際空港を旅立ちました。まだ、インドネシアに行く実感はそんなにありませんでしたが、シンガポールを経由して、メダンが近づくにつれて、いろいろな意味で胸がドキドキしてきました。私たちの乗った飛行機はその日の夜にインドネシアのメダンに無事に到着しました。



8月21日

孤児院訪問



孤児院の子どもたちと一緒に記念撮影!!

インドネシアでの活動初日は、まずスンガイ・アイル・ヒドゥップ孤児院を訪問しました。この孤児院は日本の無償資金協力により建てられている途中でした。完成式はおよそ1週間後だそうです。孤児院は、大きな道からでこぼこの小さな道に入っていったところにある、ピンク色の大きなかわいらしい建物でした。このでこぼこの道は孤児院の子どもたちが作ったそうです。凄く長い距離で大変だっただろうなあと感じました。

孤児院の先生に中へ案内されると、そこには目がクリっとした可愛らしい子どもたちが私たちを興味深げに見ていました。歓迎するために、孤児院の子どもたちは「心の友」という日本の歌を日本語で歌ってくれました。みんな、これほど歌が心に響いたことはなく、まだ何もしていないのにとても感動して涙がでそうになりました（日本に帰ってから調べると、「心の友」とはインドネシアで大ヒットしている日本の歌で、津波のときにもチャリ

ティで使用されたそうです)。その後の交流では、初めは言語が通じない分、何を話しているのか分からず、みんなとまどっていました。交流では、日本の小学校から受け取ってきた絵を交換するために、子どもたちにクレヨンをプレゼントして、絵を描いてもらいました。次第に、子どもたちとは打ち解けることができ、最後にはみんなすごく仲良くなりました。言語が通じなくても、笑いや表情で通じるんだと感じました。孤児院の子どもたちは、親がいなくて本当は寂しいはずなのに、その笑顔はすごく輝いており、本当に陽気でその姿を見ると、私たちも何となくうれしくなりました。最後に、みんなで記念撮影をして、孤児院の子どもたちに別れをつけて、バスはデコボコの道に戻っていきました。



在メダン日本国総領事館公邸へ表敬訪問

まず、橋廣治総領事をはじめ、総領事館の皆さんに温かく迎えていただきました。総領事からはこれから訪問するニアス島の活動に向けて激励のお言葉を頂きました。

総領事のお言葉の後は、訪問した孤児院の関係者と昼食をしながらの歓談となりました。そして、そこにはうれしいサプライズが!!! お寿司やお蕎麦、てんぷらなどの久しぶりの日本料理が待っていたのです。一緒にふるまわれたインドネシア料理は激辛のオンパレードでしたが、堪能できました。

日本食は本当に美味しく懐かしく感じたので、みんなはガッツリと食欲を發揮し、必死に食べ続けていました。総領事公邸で

の楽しい昼食会はこれからのインドネシア人の家庭でのホームステイに向けて、「エネルギーの補充」(池崎談)となりました。



8月22日 北スマトラ大訪問

メダン3日目は、日本の大学生の代表という意気込みで、北スマトラ大学を訪問し、政治社会科学部の学生と交流しました。緊張気味であった私たちが大学につくと、まだ準備ができていないということで、とりあえず、バスに乗ったまま大学内を見学しました。驚いたことにキャンパスはとても広くて、普通にバスや車で移動している学生の姿が何だかかっこよくみえました。

【北スマトラ大学からの歓迎】北スマトラ大の皆さんが、日本から私たちが来るのをいかに楽しみに待っていてくれたのがとても分かった瞬間でした。バスから降りてすぐに、学生さんがインドネシアの伝統的な踊りで歓迎してくれました。華やかな衣装を身にまとった女子学生の踊りはかわいらしく、本当にすてきでした。このように盛大な歓迎をうけて、とてもうれしかったです。



【交流】歓迎の式では、北スマトラ大の先生と学生代表さんが私たちのために英語で分かりやすく、北スマトラ大学について説明してくれました。その後、急に天理大学の説明も求められたため、ここで、我々がリーダー、青木さん（英米4年）が即座に英語で分かりやすく天理大学の特徴をまとめ、説明しました（「すごい、みっちーさん」(柴本談)）。この時、みんな、リーダーのたくましさとかっこよさをあらためて認識しなおしたと思います。最初の予定では、北スマトラ大学生と私たちでお互いの国や大学についてディスカッションをするはずでした。しかし、急な変更で、私たちが北スマトラ大の皆さんに折り紙を教えることになりました。例え言葉の壁があっても、向こうの学生さんは折り紙にとっても興味をもってくれ、積極的に学ぼうとしてくれました。私たちと同じくらいの年であることもあり、それぞれがとてもやりがいのある交流になったのではないかと思います。

次に、外で、歓迎の時に披露してくれたインドネシアの踊りを教えてもらいました。簡単そうで意外と難しかったのですが、異文化交流のおもしろみがとてもわかり、非常に楽しいひと時でした。日本語を少し話せる学生さんもおり、会話が少し進むと私たちは感激して親近感がとても沸きました。そして、次は私たちの番です。日本では一度もあわせたことのないソーランの踊り、これを北スマトラ大学の中庭で大勢の人がみている中、初披

露しました。緊張しつつも何とか踊りきろうとしたみんなの思いが届いたのか、最後のフィニッシュの時には盛大な拍手や歓声が耳に入ってきました。私たちメンバー全員が、ソーランで良かったなと感じた瞬間ではなかったでしょうか。その後、私たちがソーランを学生さんたちに教えてあげました。「どっこいしょっ！どっこいしょっ！」と一緒に叫んでくれた場面は忘れられません。



これらの活動以外にも、個人的に北スマトラ大学の学生さんとならない英語やインドネシア語で会話をして、お互いの大学の良いところをたくさん発見できる機会もありました。「天理大学と姉妹校になりたい」という話が出るほど、私たちの交流は日本とインドネシアを深くつなぐことができたのではないかと思います。北スマトラ大学で芽生えた友情をいつまでも大切にしておきたいです。



↑最後にそれぞれのユニフォームを交換して、記念撮影!!!

8月23日 コーヒー工場へ

メダン最終日は現地で私たちの活動を支えてくれたヘンドリ・クロイワさんの案内で、メダン郊外にあるコーヒー工場を訪問しました。スマトラ島は世界的にコーヒーの産地として有名です。私たちはそのコーヒー豆が作られ、輸出されていく過程を学びました。私たちが見学させていただいた PT SARIMAKMUR TUNGGALMANDIRI 社の工場は、インドネシアでは有名なコーヒーブランドである「OPAL COFFEE」を生産していました。



たくみ vs. 女性 800 人



到着した後は、すぐに工場の中に案内されました。そこでは、産地から送られてきたコーヒー豆が入った麻袋（一袋なんと 100kg!!!）が山積みになっていました。生産過程は、まず、コーヒーの豆をきれいな水に浸して約 1 日寝かせ、発酵させることから始まります。それから、駐車場のような所に置き、天日で自然乾燥（約 1 週間

～10 日程度）させます。そして、乾燥された豆を女性 800 人が手作業で、混入物などがないように選別します。最後に、機械で焙煎し、テイスティングをすることで品質をチェックします。これらの過程が終了すると、再び、小袋に詰められ、ラベルをつけて、ついに各小売店へと届けられ、購入にいたるわけです。

また、私たちは日本の大学生のアルバイトの時給がここで働いている人たちの日給の 2 倍になると知り、とても驚くと同時に、日本とインドネシアの賃金格差を実感しました。このように、私たちはコーヒー工場で「OPAL COFFEE」について学び、初めてインドネシアで働く人びとの現実を目の当たりにしました。

「違いのわかる男」？ 山本先生!!



コラム1

メダンの街はこんな感じ!?

メダンはインドネシア第4位の大都市です。とても活気に満ちている一方で、時間はとてもゆっくり流れていました。また行きたくなる街です。

【インドネシアの乗り物】

どこにいくにも、**becak**（ベチャ）という乗り物で移動するのが簡単です。昔のベチャは自転車による完全な人力タクシーでしたが、今はバイクが横についているパターンが多いです。風がとてもきもちいいですよー。

また、バイクもとても多く、ノーヘル2ケツ（ヘルメットなし・2人乗り）は当たり前でした。



【インドネシアの食べ物】

インドネシアといえば、何といても“果物の王様・**ドリアン!!!**”街のそこら中で売られていました。メンバーによれば「その匂いは餃子、食べればアイスクリーム!」。インドネシアに行かれたときは、ぜひ一度ご賞味ください。しかし、食べ合わせにはご注意ください。責任は取れませんので。



【インドネシアで…MAU MANDI（水浴びしたい）?】

インドネシアでは水浴び場とおトイレは一緒です。みんな、この代表的なおトイレを初体験しました。インドネシア人はトイレットペーパーを使わないそうです。なぜなら、紙を使う方が不潔に感じるからです。紙の代わりに、隣に貯めてある水を使用します。同じ水でシャワーもします。冷たい!!!

洗濯の手洗いを初体験した人が多かったのではないのでしょうか。インドネシア人はみんな洗濯板とブラシをたくみに操り、きれいに仕上げます。コツはパンをこねるときのように、もみ洗いすることとすすぎ方にありそうですが…これがなかなか難しいんだな。活動中、そして、その後もこのMANDI の話題がつきることはありませんでした。



コラム2

メダンでのホームステイ

メダンでは北スマトラ大学や天理大学関係者のご家庭でお世話になりました。ご家庭の中には日本語か英語が話せる方がおられたので、言葉の面は大助かりでした。みんな、リラックスして大変有意義な日々を満喫できました。どうも、ありがとうございました。



↑ホストファミリーと初顔合わせ！ 緊張です。でも皆さん、優しそうでよかった。



【エピソード1】

初日屋台に連れて行ってもらった時の話なんですけど、実はこの日多分4軒くらい店に行っているとおごってくれました。だけどその量が半端じゃない！「メダンの人は2時間おきに食べるから」みたいなこと言って、どんどん注文してくれるんですが、そんなに食べられるわけもなく、かなり残してしまいました。もったいないですね…でも仕方がなかったのです！ごめんなさい！（前田談）



↑大脇さんと前田さんのティータイム。



【エピソード2】

メダンでは停電する地区が毎日変わるらしく、1日だけロウソクの明かりだけで生活しました。お風呂は缶に水をくんで浴びました（丸山談）。

←丸山さんのメダンのホームステイ先の赤ちゃん。

コラム3

インドネシアは多民族国家！

インドネシアは東南アジア最大の国家であるため、多様性に富み、たくさんの独自の文化・言語をもつ民族が一緒に暮らしています。私たちも活動の中で、そのような状況に出会いましたので、その一部を紹介します。

【インドネシアの宗教】インドネシアといえば、「イスラム教!?!」。人口の約87%がイスラム教徒なのですが、「国教」ではありません。私たちがホームステイさせていただいたご家庭もイスラム教のほか、メダンでは中国系の道教(写真→)、ニアス島ではキリスト教を信仰しているところが多かったです。

今回のプロジェクトの大きな収穫の1つは多くの宗教に肌で触れることができたことだと思います。特にイスラム教に対しては、2001年9月11日に発生したアメリカの同時多発テロ事件以降、イスラム過激派によるテロ事件などがテレビや新聞で頻繁に報道され、怖いなどといったマイナスイメージがあったように思います。しかし、直接イスラム教徒の人びとと接することにより、そのイメージは打ち砕かれました。また、さまざまな「祈り」



を目の前にし、たくさんのことを考えました。例えば、「人びとはなぜ祈るのか?」、「神とはいったい?」、そして「宗教はなぜこの世に生まれたのか?」などです。ニアス島のキリスト教徒のご家庭では、食事をするとき、必ず、顔の前で手をくみ、食べ物が食べられるということに対する感謝の気持ちをこめて、神に祈ります(←写真は洗礼式の様子)。私たちが日本でご飯を食べるとき、「いただきます」といいますが、日本が豊かになりすぎ

て、感謝の気持ちは忘れてしまっていたかもしれません。私は人びとが「祈る」姿がとても神秘的で素敵なことに感じました。頭で考えたのではなく、肌でそう感じました。

【インドネシアの言葉】インドネシアは多民族国家なので、実は民族ごとに独自の言語をもっています。インドネシア語は「国語」として選択された言語で、インドネシア人は小学生から勉強するそうです。私たちが訪問したところでは、インドネシア語はもちろんのこと、ニアス島ではニアス語に出会いました。

コラム4

ニアス島とスマトラ沖地震

2004年の年末にテレビニュースなどで大きく取り上げられたスマトラ沖地震はたくさんの地震が続けて起こったものでした。日本で有名になったのは2004年12月26日午前0時58分（世界標準時間・日本時間午前9時58分）、インドネシアのスマトラ島西方沖の地点で、震源の深さ10km、マグニチュード9.0の地震です。これに伴う大津波で、インド洋沿岸諸国の沿岸部に大きな被害を与えました。死者、行方不明者は22万人を超え、被害総額は約100億ドル（約120兆円）となるなど、人類史上有数の災害となりました。

しかし、私たちが訪問したニアス島は、12月のスマトラ島沖地震の余震がだいぶ収まり、規模も小さくなってきた2005年3月29日午前1時10分（世界標準時間・日本時間午後1時9分）ごろに、同地震の震源の南東約250km沖で発生したM8.5（後にM8.7に修正）の地震により大きな被害を受けたところです。スマトラ沖地震ほどニュース性が高くなく、日本のメディアもあまり取り上げていませんが、ニアス島のグヌンシトリでは余震が3ヶ月に渡って続き、ニアス島の中心の町、グヌンシトリでは300人近くが犠牲になったといわれています。（*『2004年スマトラ沖地震・津波 関連情報』

<http://homepage2.nifty.com/jams/aceh.html> 2006年12月13日検索・参照。）



2006年8月に、私たちがニアス島を訪れたときは、少しずつ復興が進んでいましたが、まだ島の至るところで地震の被害を見ることができました。また、津波被害の影響なのか、海岸沿いに全壊の家がそのまま残されているところもありました。

1年半以上が経った今でも半壊した家があったり、学校の校舎が使えないために、テントの中で授業をしたりと支援の手が行き届いていない状態でした。その1つであったモアウォ小学校が私たちの活動の場となりました。



8月24日 いよいよニアス島へ!!!



ニアス島へ出発

今日は、ようやく生活に馴染みはじめたメダンから離れ、いよいよニアス島(グヌンシトリ)に出発!!メダンからの飛行機は小さくて少し怖かったです…。1時間の飛行のあと、ついに到着したニアス島はメダンとは違う、まさに「インドネシアにきた!!」という雰囲気でした。



教育局からモアウォ小学校へ

ニアス島に到着すると、まず初めに教育局を訪問しました。2台の車に全員で乗り込んで、ぎゅうぎゅうの中揺られながら移動しました。次に私たちはニアス島のモアウォ小学校に到着しました。メダンからの移動と、太陽の日差しの強さで、みんな少しバテていたような気がします。

子どもたちと出会った!!!

そんな中、私たちはニアス島の子どもたちと出会いました。子どもたちの目はとてもキラキラしていて、私たちを笑顔で迎えてくれました。でも、子どもたちと少し外で遊ぶだけで、暑さでかなりの体力が奪われました。ここではじめて、ニアスのホストファミリーと出会いました。やっぱり出会いの瞬間はいつでも緊張します。これから過ごすこの島はどんな島だろうか、ここでニアスの人たちとどんな生活をするのだろうか、私たちは期待と不安でどきどきしていました。



8月25-27日 モアウォ小学校での活動

今日からモアウォ小学校での活動が始まりました。初日の朝、小学校につくと、子どもたちは校庭に集まり、校長先生の話の聞いたり、歌を歌ったりするなど、日本の学校のような朝会が行われていました。それを見学した後で、私たちは子どもたちとの交流を始めました。活動では1班と2班に分かれて、クラス別・学年別に担当しました。

【1班の様子】 1班はお絵かきをしました。黒板に日本のドラえもんの絵を描いて紹介したり、一人ずつ絵を見て回ったりと、子どもたちと絵を通して触れ合うことができました。「絵を描く」ということは、言葉が通じなくても思いを伝えられるコミュニケーションでした。子どもたちは楽しそうに、さまざまな色のクレヨンを使って、真剣に絵を描いていました。子どもたちの絵には、花や山など、自然を書いた絵が多かった気がします。



【2班の様子】 2班はゴミ拾いと大縄とびをしました。インドネシアでは日本のゴム飛びに似たような遊びもあり、特に女の子がそれを楽しそうにしていました。

また、インドネシアでは、物をゴミ箱に捨てるという習慣がないのか、お菓子の袋やゴミなどは道端や校庭にたくさん捨てられていました。私たちはゴミを分別してゴミ箱に捨てるということを、少しでも子どもたちに伝えられるようにゴミ拾いをしました。ゴミを集め終わったときに「テリマカシ(ありがとう)」というと、子どもたちは嬉しそうでした。



↑ 子どもたちはいつも元気いっぱい!!!

日本文化(折り紙)の紹介

次の日には1、2班とも、日本の代表的な文化の「折り紙」を使って交流をしました。最初は3・4年生だけを教える予定でしたが、急遽、1・2年生に教えてほしいといわれました。私たちは1・2年生でも3・4年生でも、そんなにたいした違いはないと思っていました。しかし、教室の中で折り紙を教えているうちに、どこからか子どもたちがどんどん増えてきて、一人当たり10人近くの子どもをみ



なければならぬ状況になりました。実際には、たくさんの子どもたちを相手に教えることは本当に難しく、大変でした。しかも1年生にはほとんど言葉が通じなかったような気がします。一生懸命インドネシア語で教えようとしても理解ができならしく、最終的には子どもたちに折り紙を教えるのではなく、折ってあげているだけになっていたように思います。やっぱりある程度、言葉での説明が必要な交流は高学年の子どもにしたほうが良かったのではと反省点が残りました。また、2時間目も折り紙交流の予定でしたが、雨が降ったためか、勝手に子どもたちが帰ってしまったらしく、授業ができなかったのが残念でした。



インドネシアでは、紙を使って何かをつくるということは珍しいらしく、子どもたちは「紙で何ができるのかなあ」という顔をしていました。鶴、箱、手裏剣、飛行機、かぶと、そして、風船などを一緒に作りました。持っていった折り紙は、あっという間に、全部なくなってしまうました。でも、折り紙ができあがると、子どもたちはとてもうれしそうな顔をして、とびきりの笑顔を見せてくれました。



このように、折り紙の仕方を教えることは難しかったですが、単語ひとつでも、身振り手振りでも伝えることができました。決してうまくいったとはいえませんが、伝えることの難しさも、小さい教室でみんなでガヤガヤとした交流も、異文化交流だなあと改めて感じる事ができたと思います。折り紙を通して、日本の文化を子どもたちに知ってもらう事ができたのではないかと思います。

花壇造り

天理大学が校舎を寄贈するにあわせて、私たちも何かを自分たちの手でつくろうということになり、花壇を選びました。インドネシアに行く前に、花壇を造る上で必要なインドネシア語を調べたり、小学校で使える土地の広さを調べたり、土の状態を調べるなどの事前調査を行いました。実際に小学校についてみると、式典の準備で忙しく、子どもたちと花壇を造る時間まで確保できませんでした。メンバーを代表して、市場へ花壇に植える花や木を探しにいきました。その結果、花壇の真ん中には「幸福の木」と呼ばれる木を、その周りにきれいな花を植えることにしました。午前中に子どもたちと交流をし、一度昼食を食べに帰ってから、2時ぐらいに再び学校に集合して花壇を造りました。1日で完成するかと思いきや、結局3日間かかりましたが、式典には間に合いました。



花壇造りは澤山先生の指導で進みました。まず、花壇を造ることにした校庭の一角を耕しました。その後、囲いのレンガを積み上げるために、セメントを練りました。それからみんなでレンガを積み、水はけのため溝をつくっていきました。最後に、苗木を植えて、記念にみんなの名前を書いた看板を立てました。放課後に私たちがスコップで

土を耕していると、グラウンドに遊びに来ていた小学生が積極的に参加してくれて、一緒に花壇を造ることができました。この花壇を大切に、次の交流でも花壇の維持と自然の大切さについて子どもたちに教えていけたらと思います。



8月28日 校舎の完成式

今日はいよいよ校舎が完成し、天理大学からモアウォ小学校へ寄贈する式典の日です。この日はうれしいことに、朝からいい天気でした。ニアス島に来てから、毎日雨が降っていたので、式典の日も雨が降るのではと心配していたのですが、ホッとしました。

式典はモアウォ小学校の先生と生徒だけでなく、保護者の方々、近隣の皆さんもあげての盛大なものになりました。朝、学校につくと、校庭にはテントが張っており、小学生たちが日本の旗を持って、私たちが入場するときに出迎えてくれました。



式典はニアス島独自の儀式で始まりました。そして、ニアス側と天理大学側から互いにとても長い挨拶が続きました。それから、やっとメインイベントである校舎贈呈です。ニアス県知事と大橋副学長は大理石製の竣工碑への署名と校舎の前でテープカットを行いました。その後、新しく綺麗な教室の中に入った小学生はとても喜んでいました。

このあと、昼食を取りながら、アトラクションタイムとなりました。私たちは北スマトラ大学でもソーランを踊りましたが、いわばこの日が本番です。一番気合を入れて踊りましたが、音響機器の影響でテープの速度が速く、踊りにくかったです。しかし、参加者の皆様に大きな拍手を頂き、練習してきた甲斐があった、やって良かったと思えました。ニアス側からはイスラム教徒の子どもたちや隣の高校生が伝統的な踊りを披露してくれました。



アトラクションタイムの後、さらに天理大学からモアウォ小学校の子どもたちへたくさんプレゼントを贈りました。1つはインドネシア語で作られた絵本です。これはパジャジャラン大学に留学中のインドネシア語コース2年生の古橋君が朗読しました。



↑古橋くんの絵本朗読。



↑ユニフォームの贈呈。

その他にも、記念ユニフォーム、日本の小学生が書いた絵、クレヨンなどをプレゼントしました。子どもたちはとても喜んでくれました。このように、式典では、たくさんの事が行われ、インドネシアの伝統的な踊りや儀式を見ることができるなど、充実した内容で、貴重な経験ができました。

式典の次の日に、私たちは名残を惜しみながら、無事にメダンへ戻りました。

コラム5

次回へつなげて欲しいこと

- ニアス島でのゴミ拾い(ゴミ箱設置→ゴミはゴミ箱への習慣づけ)
- 交流の計画を細かく考える(予定変更が多いので、いくつか案を考えていく)
- インドネシア語を話せるようにして行く(日常語を覚えていく)
- メンバー内で連携を取る(事前の確認・連絡)
- さまざまな教育施設を訪問してほしい
- 花壇の管理を続けてほしい
- 北スマトラ大学の日本語学科の学生との交流(日本人と話す機会を提供)

+ 教訓?

- 荷物は少なめに (10 キロ以内におさませよう)
- デジタルカメラは危険!! (子どもたちに振り回されます)
- 水に注意(必ずミネラルウォーターを買いましょう)
- お菓子は飛行機の中で破れます!



コラム6

ニアスの町はこんな感じ! ?

ニアス島にはとてもゆっくりした時間が流れていました。人びとはとても穏やかで、私たち日本人を見ると「ヤホーウ（こんにちは）」や「ダダー（バイバイ）」と声をかけてくれました。私たちが一番驚いたのは子どもたちのリズム感のよさです！教室の机の上をパーカッションの楽器としてたくさん唄を歌ってくれました。そして海がとても綺麗で、日没時には毎日みとれてしまいました。まだ地震の傷跡は残っていましたが、いきいきと生活するニアスの人の力強い姿に出会いました。ちょっとしたウルルン滞在記になりました。



WE LOVE NIAS!!!



印象に残ったのは2つの宗教がうまく共存していたことです。イスラム教徒が人口の約87%を占めるインドネシアですが、ニアスはキリスト教の信者が多い島です。小学校にもイスラム教の子とキリスト教の子がいますが、みんな一緒に遊んでいました。キリスト教徒の人たちは日曜日には正装をして教会に行きます。いつもはヤンチャな子どもたちもちゃんとミサには参加していました。

ニアス島 ウルルン滞在記



都会のメダンの時と違って、ニアスでは日本語はもちろん、英語もほとんど通じないので、インドネシア語ができる山本先生と離れて一人でホームステイ先に行かせていただく時はすごく不安になりました。でも、どの家庭にも子どもが多かったので、一緒に遊ぶことによって言葉の壁を乗り越えることができました。ニアスのみなさんはとても心温まるもてなしをしてくださいました。

ニアスで一番困ったことはやはり下痢になったり、便秘になったりしたことです。メンバーの中には、きれいなお手洗いがあのご家庭のおトイレだけを毎日使わせていただいていたので、その家ではきっと「トイレの子」というあだ名がつけられていたでしょう。ニアスのお母さんたちは体調を崩したりすると、自分の子どものようにすごく心配してくださりました。



食事の主食は基本的に日本と一緒にのお米です。インドネシアでは宗教に関係なく食事のときは左手を使ってはいけません。インドネシアの人はご飯を上手に手で食べます。ホームステイ先では慣れない私たちに気遣ってスプーンとフォークを出してくれ

ましたが、これも経験と思って、みんなと同じように手で食べました。最初はぼろぼろにこぼしてしまいましたが、帰る頃には上手になりました。料理はメダン、ニアスともにとっても辛かったのですが、だんだん慣れてきてなんでも辛くないと物足りなくなり、今ではうどんなどには七味唐辛子を大量に入れてしまいます。



8月30日 さよならパーティー



メダンに戻り、ついに迎えてしまった最終日はメダンでお世話になったホストファミリーの皆さんを招待して、さよならパーティーをしました。まずは住原先生のあいさつから始まり、先生方、ホストファミリーの方のあいさつと続けました。あいさつが終わった後は、お待ちかねの豪華な食事。

食事の途中には学生からそれぞれがお世話になったファミリーへの感謝の言葉を述べました。そして最後には、血のにじむような練習をして完成させたソーランを披露しました。これが思いの外、ホストファミリーに受けたのがすごく面白かったです。楽しいひと時はあっという間に過ぎ去り、ホストファミリーとは涙のお別れとなりました。

ホストファミリーは私たちを快く受け入れてくれ、それぞれの家ではまるでわが子のようには接してくれました。夜になれば家族みんなでお出かけをして、いろいろなインドネシアの文化を紹介してくれました。本当に優しかったホストファミリー。このプログラムがうまくいったのも、私たちが安心して無事に過ごせたのも、すべてはホストファミリーのお陰であったように思います。

8月31日 帰国&そして...



8月31日の朝、私たちは全員無事に日本に戻ってきました。出発時は不安もたくさんあったはずなのに、今はもう晴れ晴れとした顔で「来年もまた行きたい!」という気持ちで一杯になりました。帰国後、大学に戻ったメンバーで橋本学長先生のところへ「無事帰りました。本当にありがとうございました」とご挨拶に伺いました。先生は私たちの活動の成功を喜んでくださいました。

第Ⅱ部 感想文

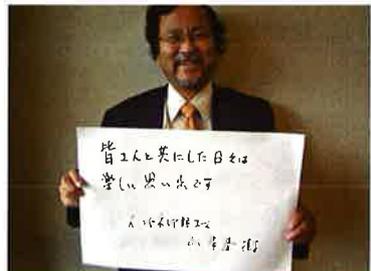
One for all All for one



記録

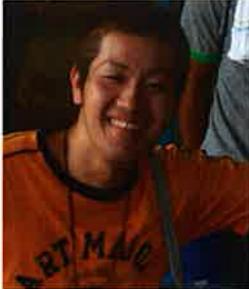


交流



Terima kasih banyak

国際文化・英米4年 青木 道裕



今回のインドネシアでのプロジェクトで感じた事、体験した事は本当にたくさんある。でも、やっぱり一番大きく感じたことは、「世界って広いなあ〜」ということだ。あのインドネシアのたった12日間の中で、自分が知らなかった事、驚いた事が何回あっただろう。毎日が期待と不安でいっぱい、刺激的で、何よりとても楽しかった。その源になったのは、やっぱり仲間と現地の子どもたちだ！学生18名、みんな昔からの友達というわけではない。このプロジェクトに参加すると決まった時、初めて顔を合わせた子も何人もいた。でも、みんなで一つの目標、プロジェクトの成功を目指して、協力して取り組んでいった。ソーランのユニフォームとして作ったTシャツの表側には「絆」という文字を書いた。その文字通り、私たち全員が一つの目標に向かって頑張り、その中で、私たち一人一人に絆が生まれていったのは間違いないだろう。そして、プロジェクトの成功を目指していく中で、学生の中で一つの合言葉ができあがっていった。それは、

「子どもたちの笑顔が見たい」

である。交流の内容などを考える時、つねにその気持ちを忘れることはなかった。そして、現地での活動を通して、子どもたちの笑顔を見て、共に笑い、勇気をもらい、時にたくましく生きる子どもたちに感動し、涙を流すこともあった。

私が一番思い出に残っているのは、地震で親や家をなくし、孤児院で生活していた子どもたちの所を訪れた時の事である。そこには、50名あまりの小学生・中学生が生活をしていて、私たちを歓迎するために日本語やインドネシア語の歌を練習してくれて、私たちに歌ってくれたのである。その中の一つにインドネシア語で歌ってくれた歌があり、はじめは意味もわからず聞いていただけだったが、ふと隣にいた通訳の人がその歌の意味を教えてくれた時、私は自然と涙を流していた。その歌の意味は、「この世には、幸せな人もいれば、不幸な人もいる。豊かな生活をしている人もいれば、貧しい生活をしている人もいる。いろんな人がいるけれど、人間はみんな同じ一人の人間。神様は一人一人を同じように見ている、いいことをすれば神様はあなたのことをもっと好きになってくれるし、悪いことをすれば、神様はあなたのことを見放してしまうかもしれない・・・」というようなものだったと思う。その歌を歌っていた子どもたちは、地震で家族や家を失って一人になり、今でこそ仲間とい

っしょだが、つらい経験をしてきた子どもたちだ。でも、子どもたちは同じような境遇の仲間たちといっしょに、精一杯笑い、遊び、そしてこの歌を歌っていた。なんて強い子どもたちなんだろう。ここの子どもは、誰一人ぐれることもなければ、親がいないことをひがむこともなく、みんな一生懸命に今を楽しんで生きていた。私はどうなんだろう？食べるものや着るもの、家や家族などを当たり前のように持っている。彼らよりも豊かな暮らしができていだろう。でも、彼らよりも今を楽しんで生きているのだろうか？食べたいものを食べ、着たい服を着て、何不自由なく生活できている日々を退屈だと思ったり、時に親をうっとおしいと思ったりする。それは、これらの事をごく普通の事で当たり前のものだと思っているからである。でも、それは当たり前ではない、すごく幸せなことで、すごく特別なことなんだと考えさせられた。彼らは今自分にある環境・状況を最大限に喜んでいるから、今ある人生を最大限楽しんで生きていける。これを書いている今も、あの孤児院の子どもたちはみんな笑顔で楽しんで今を生きているだろう。私はこのプロジェクトを通して、喜んで生きることの素晴らしさ、幸せの本当の意味を子どもたちから教えてもらった。本当にありがとう！

“Terima kasih banyak.”

初めての海外訪問

人間・生涯教育3年 池崎 未幸



「海外に行ったら何か新しい発見があるかな。」そんな事を思いながら、今年の夏初めて日本を離れ、異国の地に足を踏み入れた。飛行機が日本を飛び立ち、目的地に近づくにつれ、だんだん不安な気持ちがふくらんできた。そんな気持ちを、機内食を食べながら紛らわしていた。そして、ついにインドネシアの地に到着した。

飛行場のパスポート係りの人に“Do you have a boy friend?”と聞かれ、こわくて、ますます不安が増してしまった。しかし、ホテルに到着したら安心してきて、翌日からの事をいろいろ考えていた。

次の日から、まず、メダンでの活動が始まった。最初に訪問したのは孤児院で、思いがけない子どもたちの歌のプレゼントに感動してしまい、交流前にもかかわらず泣いてしまった。

みんなとてもかわいくて素直で、笑顔が素敵だったので、なんだかうれしかった。また、北スマトラ大学との交流も、思っていた以上に楽しかった。学生たちはとても明るくて、たくさんコミュニケーションをとることができた。折り紙にも積極的に取り組んでくれたし、踊りを見せ合って教えあい、お互いの文化に触れることができた。

メダンでは、初めてホームステイを経験した。ずっと不安に思っていたが、その直前に催された日本国総領事公邸での食事会で、いろいろなインドネシアについてのおもしろい話を聞かせてもらい、これから始まるホームステイに向けてエネルギーを補充することができたので、少し気が楽だった。ホストファミリーには子どもが3人いて、とても人なつっこかったので、すぐに仲良くなることができた。すると間もなくあの噂のドリアンが出てきた。ものすごい臭さを想像していたけれど、思っていたよりは普通だった。味は餃子のようで、とても果物とは思えなかった。果物の王様の正体は餃子だったのか！その後、夜外食をして、料理の辛さのせいかな、早速おなかが痛くなってしまい、我慢するのに必死だった。もしやドリアンがのせいだったのかな…？また、別の日には、子どもたちの塾へお迎えに行った。「塾とかあるんやあ」と、ちょっと驚いてしまった。

ニアスでの生活は本当にあっという間だった。ニアスはメダンとは大違いで、自然とともに暮らしているという感じだった。子どもたちは写真が大大大好きで、一度カメラを見せようものなら「写真とって、とって！」の嵐で大変だった。ホームステイは田中さんと2人だったので、心に余裕ができ、ホストファミリーもとっても話しやすい人たちばかりで、最高だった。小学校で折り紙を教えた日には、家でも折り紙をしたら、子どもたちはとても喜んでくれた。また他の日には、持っていった日本の曲を流したり、ホストファミリーが歌を歌ってくれたり、現地の踊りのビデオを見せてくれたりした。そして、最後の日に高校生の男の子が、つたない日本語で手紙を書いて渡してくれた。その気持ちがとても嬉しかった。メダンと比べると、食事も辛すぎることがなかったので、体調も崩さず乗り切ることができた。ニアスは日本と比べると発展途上だったけれど、本当によいところだった。

この「国際参加プロジェクト」では、本当にみんなに支えられた。もう本当にだめになりそうになったときもあったけれど、助けられて最後まで頑張ることができた。本当にありがとう。この夏、このメンバーで行くことができたことが、今、最高にとっても嬉しいことだと思っている。

最後に、トイレとお風呂だけは、最後まで慣れることはなかったなあ…。

笑顔のパワー

国際文化・英米4年 内野 準子



このプロジェクトに参加して本当によかった、というのが率直な感想です。インドネシアに行く前は、ホームステイはどんな家庭なのか、言葉は通じるのか、生活環境に慣れることができるのか、病気にならないかといろんな不安がありました。いざ行ってみると毎日が楽しくて、アッという間に過ぎてしまったなという感じです。インドネシアの人たちの温かさにたくさん触れることのできた濃い12日間だったと思います。

一番印象深かったのは、ニアスの人たちのパワーと笑顔です。モアウォ小学校では私たちに興味を持ってどんどん集まってくる子どもたちのエネルギーに圧倒されることも度々ありました。ホームステイ先にも4人の子どもがいて「日本語教えて!!」と言われて毎日質問攻撃。お父さんもお母さんもすごく親しみやすく、私のカタコトのインドネシア語を一生懸命に理解しようとしてくれました。また家族のこと、地震のことなどいろんな話もしてくれました。言葉の壁なんて感じている暇もなかったような気がします。

地震や津波で被害を受けたニアスの人たちの何か力になりたいなあと思っていたけれど、反対に彼らから元気を与えられ、人と人の温かい関係を思い出させてもらいました。まだまだ復興の途中で、自分たちのことだけでも精一杯なはずなのに、私のことを受け入れてくれて本当にありがたうという気持ちでいっぱいです。

メダンでのホームステイも短い期間ではあったけれど、陽気なインドネシアの家庭で過ごすことができ、本当に楽しかったです。特に、すき焼きを作ったときにはおいしいおいしいと言いながら、いつのまにか歌ったり踊りだしたりと最高に楽しい思い出となりました。日本との時間の感覚の違いに驚かされ、ハラハラしたことも、今思えば良い思い出です。

またメダン滞在中には“発展途上国”としてのインドネシアの一面もみることができました。1つは道にゴミを捨てる人たち、そして、そのゴミを拾って生活する人たちもいるということです。テレビなどではよくゴミ山で生活をする人たちが取り上げられていたりしているけれど、決して特別なことではなく、インドネシアの街ではいたるところである光景だということを知りました。もう一つは様々な格差です。コーヒー工場では、中国系経営者と重い豆の袋を運ぶ男性労働者・豆を手作業で選別する女性労働者との違いを目の当たりにしました。

また街には、大きくてきれいな家に住む人たちもいれば貧民街で暮らす人たちもいました。こういった発展途上国が抱える問題を肌で感じることができ、とても貴重な経験になりました。

最後に、このプロジェクトを通して、協力してくださった人たちの気持ちが形になり、たくさんインドネシアの人たちの笑顔に出会えたことを本当にうれしく思います。そして、この経験をきっかけとして国際協力についてもっと学び、いつかまたインドネシアを訪れたいです。このプロジェクトに参加できて、心からよかったと思います。

伝えたい想い

国際文化・英米4年 大脇 千紘



私が今回このプロジェクトに参加して一番感じさせられたことは「言葉の違い」に関してでした。インドネシアの人びとはもちろんインドネシア語を母語としていますし、私たち日本人は日本語を母語としています。数週間の勉強会を行いました、その少ないインドネシア語の知識の中でどうやってコミュニケーションをとっていけるのか、私自身も大変不安でした。しかし、私のホームステイ先のファミリーたちは皆私の意図していることを理解してくれようと日本語や英語を一生懸命勉強してくれました。特にニアスの皆さんは日本人を見るのも生まれて初めてといった様子でしたので、上手くコミュニケーションがとれるかどうか本当に心配でしたが、一生懸命に話をしてくれる姿がとても嬉しかったです。

ニアスに到着した翌日、慣れない環境のせいか、私は小学生との交流中、急に体調を崩してしまいました。私のホストマザーは私たち学生が交流を行っていた小学校の教師だったので、すぐに私のもとへ飛んで来てくれて、ずっと側に付き添ってくれました。その時、彼女はインドネシア語と片言の英語で必死に私を励ましてくれました。この時ほど、もっと一生懸命インドネシア語を勉強しておけば良かったと後悔したことはありませんでした。その日は一日ホテルで休養をいただき、次の日からまたプロジェクトに参加させていただいたので

すが、この日からステイ先での私への対応が少し変化しました。私のご飯だけ外で買って来た別メニューになったのです。私も最初は疑問を感じながらも普通にいただいていたのですが、ある時やっぱりこれは不自然と思い、長女の VISCA に尋ねてみました。すると彼女は少し困った笑顔を見せながらこう言ったのでした。「うちは家族が多いから、皆と同じご飯だと、あなたにあたる量が少なくなってしまう。それに家のご飯を食べて、また体調を崩すといけないから」と。それを聞いたとき、私は「ああ、なんて失礼なことを今までできてしまったのだろう」と思いました。確かに私は最初の日、家のご飯を少ししかいただきませんでした。何気ないその振る舞いがホームステイ先の皆に余計な気苦労とお金を使わせてしまっていたのです。私は申し訳ない気持ちと有難い気持ちでいっぱいになりました。もし言葉がスムーズに通じたら、私はもっと早くにそういったことに気づけたのかもしれませんが、言葉ではないその家族のやさしさから気づけたことが、私にとってとても大きかったと思います。

実際に、言葉が上手く通じなくて本当に困ったことは一つもありませんでした。言葉が通じないからこそ、お互い「伝えたい」という気持ちで素直な会話ができたとと思います。そこには駆け引きも何もなく、ただ純粋な心がありました。日本にいて気づきもしなかった、そういった真心のあたたかさを私は改めて実感することができました。今後もこの気持ちを忘れることなく、毎日を通していただきたいと思います。

たくさんの「出会い」にありがとう

国際文化・イスパニア2年 葛西 隆太郎



何気なく参加する事に決めたこのプログラム。7、8月とプログラムに近くにつれ、本当に自分にボランティアができて、それが人の役に立つのか、ホームステイでは現地の生活に馴染む事ができるのかなど、不安や恐怖心、また好奇心でいっぱいだった。

出発、インドネシアの地に立ち、いざホームステイ、孤児院訪問、北スマトラ大学との交

流などのメダンでのプログラムをこなしていくうちに、予想していなかったような人の温かさを肌で感じ、子どもたちの笑顔の輝きを目の当たりにした。数日間、現地の生活を体験して、この国の人はおおらかで自分に対して正直だと思った。しかしその反面、自分に対する正直さは、ポイ捨てやモラルの足りない喫煙などの自分に対する甘えになっているような気もした。また、インドネシアに入り、ホストファミリーと一緒に生活していて衝撃的だったことは、太陽が沈み、車の中で信号待ちをしていた時に、小さい子どもたちが車道に入り、サイドガラスの真正面でおもちゃの楽器を鳴らし、歌を歌ってチップを求めてきたことだった。昼間は、ストリートチルドレンの存在も思わせないのに、その時はインドネシアの表と裏を見たようで、とてもショックに感じた。

ニアスでは、モアウォ小学校の子どもたちとの交流が主な活動だった。折り紙を教えたり、縄跳びをしたり、歌を歌ったりしたが、何をするにも子どもたちは好奇心と笑顔でいっぱいだと感じた。暑さが厳しい時期ではあったが、元気な子どもたちに励まされ、いろいろなものに積極的に取り組めたと思う。ホームステイでは、毎晩、一緒に歌を歌ってインドネシアの有名な曲を教えてもらって、とてもいい思い出になった。

現地での生活・交流を通して、衣食住など様々な面で日本とは違う世界を感じた。トイレットペーパーのないトイレ、濁った水の風呂、十分に言葉の通じないホストファミリー。そんな日本の生活にはない満たされない生活。しかし、そのような生活の中で、私は不満よりも満足感でいっぱいになることができた。なぜなら、最近の日本人が忘れていた大切なモノがあったからである。それは、優しく情の深いホストファミリーの愛情であったり、太陽のような子どもたちの笑顔であった。

最後に、私はこのプロジェクトを終えて、とても良いメンバーに巡り会えたと思った。大きなぶつかり合いもなければ、離脱者もいなかった。それぞれ全員がサポートし合った結果、このプロジェクトを楽しく、有意義なものにしたのだろうと思う。いつ地震が起きても不思議ではないインドネシアで、天候にも恵まれ、無事全員そろって帰国できたことはとてもありがたい事だと思った。たくさんの先生方や、OB、OGの方々、また、現地のサポーターにホストファミリー、そして、このメンバーの支えがあったことを絶対忘れないようにしたい。

かけがえのない思い出

国際文化・英米4年 岸田 怜子



「国際参加プロジェクト」のチラシが目にとまりました。私は今までボランティアや海外のこうした活動に興味がありましたが、あと一步踏み出す勇気がなく今まで過ごしてきました。でも今、4回生になった時、「来年からは就職するし、もしかしたらこうした活動に参加できるのは今年が最後かもしれない」と思い、「参加したい!」と心に決めたのが始まりです。

場所はインドネシア。名前は聞いたことがあるけれど、どんな国なのか何も知らない状態でした。今まで私は先進国と呼ばれる国にしか行ったことがなく、インドネシアに行くということは楽しみでしたが、大きな不安もありました。生活習慣や言葉、特に日本では身近にいる蚊や犬、鳥などがインドネシアではとても気をつけなければならないということが、地域の違いを感じたし、怖かったです。

さまざまな思いを胸に、いざインドネシアに出発。インドネシアに着くとドキドキして気持ちが高ぶってきました。生ぬるい風が吹いていて、少し暑かったです。空港のバスの扉が開けっ放しで走り出したことにとっても驚きました。これが第一印象です。

インドネシアではメダンで3日間、ニアス島で5日間ホームステイをさせていただきました。このホームステイが私にとって最高のものとなりました。ホストファミリーはインドネシアに来た私たちのために、インドネシアの料理や市場や宗教、踊りや歌をたくさん教えてくれました。私の下手なインドネシア語を熱心に聞こうとしてくれたり、日本語を知ろうとしてくれたり、毎日ご飯を一緒に食べて、お互いの国の話をして、歌を歌ったり（ドラえもんは20回は歌いました）踊ったり…本当に心が温かい人たちで、私の不安は一気に吹き飛びました。言葉は通じなくても、ボディランゲージで通じるし、一生懸命伝えようとすれば、いいたいことは伝わると感じました。短い間だったけれど、一緒に過ごしているうちに、自分の居場所がある、そんな気がしました。本当の家族のように私たちを受け入れ、心から接してくれました。私にとってかけがえのない、本当に大切な人たちです。

日本とインドネシアの違いもたくさん目にしました。生活習慣の違い(特にトイレや入浴)、食事の違い(料理は辛くて、飲み物は甘い!)、文化の違い、習慣の違い(ごみを道端に捨てるなど)、宗教の違い、貧富の差が激しいことなど、あらゆる違いを実際自分の目で見て、

肌で感じ、体験しました。これは私の力となり、考え方にも変化を与えてくれました。考えさせられることが多く、ごみ問題や貧富の差など、協力し、改善していけることは少しでも力になりたいと強く感じました。私たちが支援するということで行きましたが、逆に私はインドネシアの人たちにパワーをもらいましたし、彼らの心からの笑顔を見て、それが私の力になっていったと思います。

日本とは違うからこそ、最初は戸惑うけれど、慣れたり、その違いを知り学んでいくうちに、その違いのすばらしさや異文化のすばらしさが少しずつわかってきました。このプロジェクトを通して、私は視野が広がったし、インドネシアで出会えた人たちのおかげで、人のあたたかさや強さ、優しさを本当に感じることができました。インドネシアで過ごした毎日が、そして出会えた人すべてが宝物で貴重なものとなりました。この12日間は私にとって忘れることのない最高の日々です。

最後に先生方やプロジェクトに関わってくれたみなさん、一緒に過ごしたメンバーにも心から感謝しています。ありがとうございました。テリマカシー！！！！

過ごして知ったインドネシアの今

国際文化・英米3年 佐賀木 昭子



私が「国際参加プロジェクト」に参加する際に、特に注目していたのは、「発展途上国と先進国との貧富の差について」、「発展途上国の環境問題」、そして「被災地の子どもたちの学習状況」の3点でした。

初めに、インドネシアのメダンへ行って驚いたことは、インドネシア内での貧富の差が激しいということでした。私は地球規模での貧富の差とは何かということを知ることができると思っていたのですが、体験したのはより個人に密着した生活の中での貧富の差というものでした。まず、ホームステイを通して、中国系の家庭とインドネシア人の家庭での生活水準の違いを見ることができました。例えば、

中国系が住む地区はゲイトと呼ばれる塀の中にあり、塀の中に入るには、毎回守衛が門を開け閉めするシステムになっていました。また、コーヒー工場では、中国系が経営者でインドネシア人は労働者という社会の仕組みを見ることができました。そして、この時、中国系の家がゲイトの中にあるのは、労働者による反乱が起こった場合、自分たちの身を守るためだということも知りました。

一方、ニアス島では環境問題の点について考えることができました。島では、生活排水が川へ直接流れ込むことにより、海が汚染されていました。街角には、ユニセフが寄贈したゴミ箱があるにも関わらず、ゴミをゴミ箱に捨てるという習慣がないために、道端に大量のゴミが放置されていました。そして、ゴミ焼却所の施設もなく、小学校のすぐ隣で仕分けされることもなくゴミは焼却されていました。このような状況は、子どもたちの健康状態や衛生状態にも悪影響を与えるものだと思います。したがって、次回の「国際参加プロジェクト」では、ゴミ処理問題を島民に訴えるなど、少しでも島民の意識を変えられるように活動していただきたいと思っています。

子どもたちの学習状況については、地震によって校舎にヒビが入ったため仮設校舎で授業を行っていましたが、教室が足りないために、十分な学習をすることができない状況でした。しかし、今回のプロジェクトで建設した新校舎を十分に活用して、子どもたちの学習状況の改善を図れることを期待したいと思います。

今回のプロジェクトに参加して、文化の違いや考え方の違いを知ることができ、また、これから国際問題を考えていく上でとても勉強になりました。

「出会い」は明日へのパワーになる！

国際文化・ドイツ2年 佐藤 宮子



私は、今回第6回「国際参加プロジェクト」に参加させて頂いて、日本と異なった環境、文化の違いの中で生活する中で、いろんな事を考え、学ばせて頂く事ができました。実は、今回が初めての海外だったので不安も期待もたくさんありました。もちろん、家族にもたくさん心配されました。メン

バーに決まって、様々な研修を受けるうちに、「本当にインドネシアに行くんだ」という実感と、まだ自分が何にも知識をもっていないことに気づかされ、「私たちに何ができるのだろう」と不安になりました。しかし、「そのことで悩んで落ち込んでいたら、このプロジェクトの為に資金提供して下さった方々、募金活動をされた方に申し訳ない。今、自分にできることを見つけ、そのことを実行に移して行こう」と思い、準備活動を頑張りました。

遂に、8月19日、結団式の日がやってきました。学長先生をはじめ、各先生方からお言葉を頂き、もう一度決意を胸に、8月20日に日本を飛び立ちました。空の旅は本当に快適で、あっという間にインドネシアのメダンに到着しました。空港に着くと、入り口にはたくさんの方がいて、「タクシーに乗らないか？」と私たちみんなが聞かれました。正直怖かったのですが、その人たちも生活の為に必死で働いているのだと思いました。日本では見られないその風景はインドネシア以外の国でも存在するのだと思い、日本で育った私は初めて貧富の差というものを感じました。

翌朝、遂に活動する日がやって来ました。孤児院に着くと、たくさん子どもたちが私たちを迎えてくれました。初めは、私たちも子どもたちもお互いに戸惑っていましたが、日本の小学生からの絵を渡して、絵を描いてもらう時に、指差し会話帳を片手に「この絵は何か？」と聞いてみると、ある子は恥ずかしそうに、またある子は嬉しそうに答えてくれました。みんな本当に素直で、津波・地震の被害にあったと思えないくらい、元気で楽しそうでした。日本の歌を小さい子も大きな声で一生懸命に歌ってくれて、本当に嬉しくて、帰りたくなりました。お別れの時、みんなは握手をしてくれて、ずっと手を振ってくれて、「本当にインドネシアに来て良かった」と心から思いました。その日の夕方、ホームステイ先の家族と対面しました。ホームステイも勿論初めてだったので、ハラハラドキドキしながら自分の名前が呼ばれるのを待ちました。遂に名前が呼ばれ、ホームステイ先の家族の紹介を受けたとき、娘さんがドイツ語を勉強していることを聞き、私もドイツ語を専攻しているので、偶然にもそんなことがあることに驚き、「もしかしたらこの家族に出会うことは運命だったのかもしれない」と思ってしまいました。その日、初めてマンディをしました。そしてインドネシアのトイレも見ました。日本の文化と違うことが多く、カルチャーショックも受けましたが、違う文化を楽しんでみようと思いつきました。家族はみんな愉快で特にお母さんが面白く、ものまねをしたりして楽しませてくれました。本当は他人なのに「あなたは私の2人目の娘よ」と、こんなに家族のように優しくしてくれて本当に嬉しくて、家族の大切さを改めて実感でき、だからこそ本当の家族をもっと大切にしなければならぬと思いました。

大学でも、コーヒー工場でもみんなが親切で、また、みんな写真が大好きで、おちゃめで本当に貴重で楽しい経験ばかりさせて頂きました。

ニアス島でも毎日が本当に楽しかったです。私たちが国際協力に行って、島の子どもたちに何かしてあげたというよりも、私たちの方が彼らに多くのものをもらった気がします。特に彼らの笑顔にはいつも勇気づけられました。学校に登校するときも、下校するときも、「宮子！」と呼ぶ声が聞こえ、振り向くと昨日遊びに来た子であったり、友達になった子であったり、私を島の一員として認めてもらえた気がして嬉しかったです。そしてまた、私の方からも、通りすがりの人に「YAAHOWU！」と挨拶を交わせるようになっていきました。子どもたちのパワーにはいつも驚かされてばかりでした。「お姉ちゃん！」と私の両手にしがみついて離さなかったり、カメラを向けると、みんなが一度に向かってきて、対処に困ったり、「この子たちがこの素直な心のまま大人になって欲しい」と心から思いました。

約2週間というのは本当に早いものでした。インドネシアに行って、本当にいい経験をさせて頂きました。そしてまた、来年の課題・自分に対する課題も見えてきました。来年の課題は、ごみをゴミ箱に捨てる習慣を子どもたちに学んでもらうことです。現状は、子どもも大人もごみを地面に捨てたり、置きっぱなしにしたり、ごみだらけのひどい状況でした。また焼却方法にも問題があるようです。私は、環境問題に今一番関心を持っているので、インドネシアのごみ事情について調べ、対策を考え、来年の活動の手助けがしたいと考えています。自分に対する課題としては、私は将来、国際協力のできる仕事に就きたいと考えているので、専門的な技術、そのための勉強、英語をもっと話せるようになること、専攻語であるドイツ語の上達、将来の夢に対する思いを高めていこうと思いました。インドネシア人の考え方、ものの見方を知って、自分の視野が広がった気がします。したがって、すべて日本人の視野で物事を考えるだけでなく、これからも色んな国の色んな考えを知って、自分の視野を広げていきたいです。このプロジェクトにご協力いただいたすべての方にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

インドネシアが恋しい！

国際文化・英米2年 柴本 みなみ



インドネシアで過ごした12日間を振り返ってみると、一日一日の内容が本当に濃く、すばらしく充実したプロジェクトになったと感じています。日記を読み返すと、昨日のようにその時の場面が思い出されるのと同時に、夢だったようにも感じられます。私はこのプロジェクトの中で、地震・津波の被害にあったインドネシアの地で小学校を建設することに興味があったのはもちろん、ホームステイで実際に現地の生活をするにもすごくワクワクしていました。メダン、ニアス島でのそれぞれのホームステイ、言葉が通じなくてもとても優しくしてくださったホストファミリー、一生忘れることができません。特に、私はホームステイを通して、自分と同じくらいの年齢の子と接する機会がたくさんあった方だと思います。ニアス島のホームステイ先では、現地の高校生10人以上が寮のようにみんなで生活している中で、いっしょに5日間を共に過ごしました。最初は、「え、何でこんなところに？普通の家じゃないの？」と不安な面持ちでいたのですが、インドネシア語の一冊の本を頼りに、みんなに囲まれて話していくうちに、言葉がそんなに通じなくてもノリで何とかできるなとわかり、すぐにみんなと打ちとけられました。そして、日本語を教えてほしいと言われ、インドネシア語 - ニアス語 - 日本語で単語をノートに書いて辞書のようにして、みんなが勉強してくれたことは何より一番うれしかったです。また、夜遅くまでみんなで話したり笑いあったりする時間も本当に楽しかったです。ここでの出会いは非常に大きいものと感じています。そして、現地の子は歌が好きでギターを弾きながら歌う姿はとてすてきでした。また、小学生も机を太鼓のように叩きながらよく歌ったり、踊ったりしました。こういうノリは最高だなと思いました。苦労したといえば、やはりトイレで、お風呂も完全に水浴びなので、最初は本気でいじめにあっているみたいでした。それでも最後にはあたりまえに mandi (水浴び) していた自分に驚きました。人間の適応力はすごいですね。しかし、私の体は、水や辛い食べ物にすごく敏感で、ついには小学校建設の手伝いの前に倒れてしまいました。すごく残念だったのですが、この経験で自分の体は弱いこと、つまり日本がどんなに豊かできれいであるかということをつくづく感じることができました。

私がこのプロジェクトの中で、ニアス島の小学校を訪れ、子どもたちと交流する中で忘れられないのは、私たちを迎えてくれる子どもたちの顔がすごく生き生きとしていて、とてもすてきな笑顔で接してくれたことです。実際に、今でも地震は頻繁に起こっているとのことでした。しかし、私たち日本人が道を歩いていれば、気軽に笑顔で声をかけてくれ、優しく接してもらうたびに、逆に私が現地の人たちから元気をもらっているなど肌で感じました。日本では、物にあふれ何不自由なく暮らしている中にも、周囲の人と壁を作り、自分だけの世界にひきこもってしまう人も多々います。実際に、私も家にひきこもっており、楽しいと思えることが少なく感じていた毎日でした。しかしニアス島の人たちを見ると、子どもたちは十分に学校で勉強ができるわけでもなく、家で一生懸命手伝いをしたり、水道も十分に設備されているところで生活しているわけでもないのに、すごくうれしそうな顔をして笑ったり、みんなで音楽をかけて歌って踊って楽しんでいる姿がすごく幸せそうに見えました。人間の幸せって一体何だろう、と考えさせられました。私はここで、物がありふれていることをあたりまえに思っただけではいけないのだとすごく気づかされました。そして、何事もありがたいと感じながら日本で生活していこうと改めて感じました。

最後に、この旅の中で、面白いことに、私の顔がインドネシア人みたいだ、とよく現地の人に言われました。一応、私は「純日本人」です。しかし、実際インドネシアにいたときの方が何かしっくりきていて（お腹を壊したのはしょうがないですが・・・）本当は、「自分はこっちにいるべき者なのでは。」なんて感じたりもした旅でした。また、いつか帰りたいと思います。

学びっぱなし

人間・宗教2年 田中 初子



私がこのプロジェクトに応募した理由は「海外へ行きたい」という小さな思いつきからでした。国際参加プロジェクトに行けば、自分の視野がもっと広がり、海外へもっと行きたい気持ちが高まるかなと期待していました。しかし、最初の研修に行くと、初めて会った人が多くて、正直、「私はこのプロジェクトでやっていけるのかな」と不安になりましたが、ソーラン節の練習をす

る中で、次第にみんなで作り上げていこうというものが感じられました。研修を終える頃には、インドネシアに向けて、期待と不安で一杯でした。

8月20日、インドネシアへ向けて出発しました。現地に行くと、そこは自分が想像した以上だったので、期待と不安で一杯だったものが、一瞬で不安に変わりました。初めて目にしたメダンの街は、貧富の差が激しく、例えば豪邸の家の周りには人が誰もいないのに、ボロボロの家の周りはゴミだらけで、早朝から人が外で座っていたので、「この人たちは働くところがないのかな」と不思議に思いました。このような様子は、なぜか私を切ない気持ちにさせ、不安をつのらせたのです。

しかし、メダンでの活動が始まると、いつのまにか不安は消え、毎日が初体験で、楽しくなりました。メダンのホームステイ先では、私を喜ばしてあげようとしてくれるのがすごく伝わり、インドネシア語とか食事の面とかで、とても親切にしてくれました。また、宗教の面でも、隣が教会だったので、キリスト教を体験しました。お祈りも教会も神秘的であり、とても不思議なものに感じました。

一方、ニマス島では、日本とはまるで違い、海は臭くゴミだらけで、ハエの量は半端ではなく多くて、本当にこれこそ想像以上でした。ニマス島ではまだ地震の被害の後が残っており、訪ねた小学校の2階ではドロドロの教科書が山積みになっており、満足に勉強もできないという話を聞きました。でも、ニマスの人達は不満も言わず、笑顔を絶やさない人達が多かったです。ニマスの生活を体験する事により、私は「自分の日本の暮らしには、反省させられることがたくさんあるなあ」と思いました。例えば、日本では、学校へ行くことを不満に思うこともありましたが、小学校を訪問して、「与えられているものは当たり前ではなく、ありがたいものなんだ」と感じる事ができました。

また、日本と全く違う環境で生活しながら、最後まで毎日充実した時間を過ごせたことを感謝したいと思います。体調が悪いときに仲間同士、助け合ったことやニマス島のファミリーから受けたやさしさから、人に対する思いやりも改めて学びました。本当に言葉では書き切れないほどの貴重な体験をしたと思います。そして、私はこのプロジェクトを通して、日本という国はどれだけありがたいものなのかということ強く感じました。私はインドネシアに行く前に「自分が過ごした無駄な今日は、昨日、亡くなった人が痛切に生きたかった明日である」という言葉を偶然目にしていましたが、インドネシアで改めてこの言葉の意味を考えさせられたと思います。これからは、この言葉を胸におき、日々ありがたさを感じていきたいです。

楽しかったインドネシア

国際文化・中国3年 中江 李栄



私はこの「国際参加プロジェクト」に参加し、本当にいい経験ができたと思います。日を迫うごとに「異文化」というものを感じ、新しい知識を得る楽しみを感じ、本当に楽しかったです。

まず、始めに行ったメダンでは2つのこと感じました。

一つは言葉というのは大事であるという事を認識させられました。2日目に行った孤児院でのことでした。子どもたちが日本の歌を日本語で歌ってくれたときすごく感動しました。そして、この感動を自分の言葉で子どもたちに伝えたかったけれど、インドネシア語が分からないから言葉にできませんでした。子どもたちがクレヨンを使って絵を描き、描き終えたとき、その絵はとても上手でいろんな事を話したかったけれど、この時も上手く言葉にできなかったです。すごく悔しかったです。そのほか、3日目に行った北スマトラ大学で折り紙を身振り手振りで教えたけど、やはり言葉が通じないゆえに途中で惑うことがあったなどと、これらのことから言葉の大切さを再認識できました。二つ目は一つの国にインドネシア人と中国系の人といったように民族の違う者同士が住むことは問題もあるということです。このことを学んだのは、朝の何気ない会話の中でした。ホストファミリーの子どもたちは学校に行くとき車で行き、大体の中国系の子どもたちは車を使うと、お母さんは話しました。以前にインドネシアで暮す中国系の方は商売を成功しているからお金持ちであると聞いたので、私は車での登下校はただお金持ちだからだと思いました。しかし実際はそのような理由ではなく、インドネシア人は中国系の人を良く思っていないので、いつ何が起こるか心配だからという理由でした。やはりいろいろと異なる民族の共同生活には問題があるということ学びました。

次にニアス島では、食文化、生活文化の違い、宗教に対する熱心さを感じました。食文化では基本的に辛いということ、スプーンなど使わず手で食べることを実体験し、日本ではできない経験をしました。生活文化では時間に対するインドネシア人と日本人の認識の違いから、トイレやお風呂などいろんな異文化を感じました。宗教の面においては、食事前のお祈り、日曜日に教会に必ず行くことなど、宗教に対してすごく熱心なことを感じました。

この12日間を通して、インドネシアの人はほとんどの人が温かく、好奇心旺盛で元気だ

と思いました。子どもたちと遊んでいると、自分の家に見ず知らずの私を招待しようとしたり、町ですれ違ふと挨拶をしたりと、本当に温かいです。また、子どもたちはカメラに対してや花壇造りのときなど、様々な場面でつねに集まってくるし、また、いつどの学年が授業をしているのか分からないくらい、運動場にはいつも子どもが遊んでいました。

今回の活動は本当にいろんな事を学び、とてもいい経験ができました。将来、国際ボランティアに関わる仕事をしたいと、より強く思うことができてよかったです。

本当にありがとうございました。

「仕合せ」

国際文化・英米2年 中小野 一八



孤児院では、予想もしていなかった子どもたちからの歓迎の歌。こちらが喜ばせるはずであったのに逆に喜ばせてもらいました。学生の中には涙する人も。自分も泣きそうでしたが、なんだか泣くのは恥ずかしかったので、汗が目に入ったような雰囲気を出しながら必死に涙をこらえていました。ここでは習字をする予定でしたが、日本から墨汁を持ってくることを忘れたことに気づき、急遽予定を変更してお絵かき。習字担当であった自分のミスです。皆さん本当に申し訳ありませんでした。プログラムがうまくいくかどうかすごく心配だったのですが、いざ始まってみればそんな心配は吹っ飛んでいきました。子どもたち一人一人が真剣に絵を描いてくれたり、一緒になって歌ってくれたり最高な時間を過ごすことができました。子どもたちにすごく助けられたように思います。気さくで、歌が大好きで、本当にやさしかった孤児院の子どもたち。ここでの交流は本当に感動的なもので、こちらが勇気づけられ、励まされ、そして癒されたように思います。心温まる感動をありがとう。

ニアス島では荷台に乗り、揺られること40分。ようやく目的地に到着。日本人を見るや否や、駆け寄ってくる元気な子どもたち。日本人は暑さに体力を奪われグダグダになっていましたが、子どもたちにそんなことは関係なし。本当に元気で、とにかく遊ぶ。我先にと遊ぶ。これでもかというぐらい遊ぶ。そして写真が大好き。日本人とは根本的なものが違うの

ではないかと、ついつい思ってしまうぐらいにエネルギッシュ。1、2年生に折り紙を教えているはずだったのに、気づけば隣には5年生。順番で縄跳びを跳ぶはずであったのに、いつの間にか男子が独占し、女の子は機嫌を損ねている。そんな一見ハチャメチャな子どもたちが、いつもと違う顔を見せたのは校舎の完成式。真剣な顔つきできっちりと並び、とても上手なダンスを踊っていました。愛嬌たっぷりで、憎くても憎めない、毎日元気いっぱいだったニアス島の子どもたち。本当に楽しい思い出をありがとう。

「お父さん、お母さん、20年間ありがとうございました」と、この世とのお別れをしたのは、ニアス島からメダンに帰る飛行機の中でのこと。気圧の変化がすごく、飛行機は揺れ、水滴がしとしと落ちてきて、機内は8月末だというのに肌寒い。メダンに着いた瞬間に血の気が一気に引き、トイレに駆け込む始末。二度と体験できることではないでしょうし、二度と体験したくないことです。それでも、今回のボランティアで数々の貴重な体験と、数々の文化の違いを肌で感じる事ができて本当によかったです。その昔、「幸せ」という言葉は「仕合せ」と書いていたそうです。「仕合せ」とは、人と人との巡り合わせのことです。このボランティアでもたくさんの「仕合せ」がありました。メダンでのホストファミリーとの「仕合せ」。ニアスでの子どもたちとの「仕合せ」。大学の先生方との「仕合せ」。そして、今回一緒に旅をともにできた仲間たちとの「仕合せ」。たくさんのかけがえのない「仕合せ」をありがとう。

インドネシアの2つの家族

国際文化・英米2年 中村 祐太郎



私はこの旅を通して、子どもたちとの楽しい交流と、2つの家族を得ました。見るもの、聞くもの全てが新鮮で、驚きの連続でした。風景、肌の色、言葉、食事、習慣…。日本とはまったく違うものばかりでした。貴重な体験をさせて頂きました。このプロジェクトを作ってくれた、関わってくれた全ての人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。

今回のプロジェクトでの私たちの役割は、交流を通し子どもたちに楽しい時間をプレゼントし、災害による心の傷を癒してあげることでした。私は、初めての海外ということで不安でいっぱい、出発前の数日は、本当に行くべきなのか、迷っていました。しかし、子どもたちの100%の笑顔を見ると緊張も不安も吹き飛んでいきました。「インドネシア人の子どもとはどんな遊びをしたらいいのだろう？まず会話は？」と考えている私に彼らは笑いかけしてくれました。自分の小ささに気づかされ、癒すつもりが癒されていることに気づきました。インドネシアの人びとはとても明るいです。一度会ったら友達です。それは大人も子どもも一緒のようです。それが私たちのプロジェクトを楽しいものにしてくれたことの一つでした。

ホームステイでは、メダンとニアス島でまったく違うタイプの家族と生活をともにしました。メダンのホストファミリーは独身で、兄弟と生活していて、召使がいる3階建ての家に住むお金持ちでした。たくさんの店に連れて行ってきて、いろいろなものを食べさせてくれました。しかし、インドネシアの食事は、私の舌には最後まで合いませんでした。根本的な部分で合いませんでした。インドネシアの不動の人気No. 1フルーツであるドリアンも、私にとっては王様ではありませんでした。逆に、ニアス島のホストファミリーは一般的な家庭といった感じで、生活水準は確実に日本より低かったです。冷蔵庫がないので、ご飯からは少し腐った臭いがしました。また、コップの中にはアリがいて、体を洗う水は黄ばんでいました。ニアスでのホームステイは5日間だったのですが、正直これ以上はここにはいられないと思いました。しかし、それを経験させてもらった私は、日本に帰ったら日常生活をする上で文句は言えないなあと思いました。

本当に貴重な体験ばかりでたくさんのことを感じさせてもらった12日間でした。子どもたちとの交流では、私たちの役目を果たしたと思うし、同時に2つもの家族を得ることができました。たくさんの人に私たちと同じ経験をして欲しいので、来年、再来年と、このプロジェクトはずっと続けて行って欲しいと思います。

インドネシアで考えたこと

人間・宗教1年 中山 卓己



私は、今回のインドネシアでの国際ボランティアを通して、たくさんの事を学ばさせていただきました。インドネシアはおもしろい国だと感じました。まず、さまざまな宗教が共存しているところです。インドネシアではほとんどの人がイスラム教の信者です。したがって、今回行ったインドネシア第4の都市メダンもたくさんのモスクがあちこちに立っており、礼拝の時間になるとアザーンが街を覆い、とても神秘的な感じにつつまれました。しかし、インドネシアにはイスラム教の他に、キリスト教（カトリック、プロテスタント）、ヒンドゥー教、仏教とさまざまな宗教があり、街の中でも、ヒンドゥー教のお寺をみかけたり、キリスト教の教会があったりしました。インドネシアの人びとにとって、宗教はとても密着した存在であり、宗教と共に生きる素晴らしい国だと思いました。

そして、他に感じた事は、インドネシアの人びとはみんなフレンドリーで、すごく陽気であり、困った時は見ず知らずの人でも助け合うということです。例えば、メダンでは、ホームステイ先の家までお父さんと車に乗って帰る途中、なんと車がエンストしてしまいました。すると、全然見ず知らずのおじさんが次から次へと集まってきて、だいたい2時間ぐらいの間、一緒に車を押してくれたり、エンジンを何度もかけてくれたり、どうしたらエンジンがつくか、一生懸命考えてくれたりしました。そして、エンジンがついた後、あたかも助け合うのが当たり前のように、「ありがとう」、「どういたしまして」という簡単な挨拶をして別れました。私はこの人びとは助け合うのが当たり前なんだと感じ、すごくあったかい気持ちになりました。本当に素晴らしいと思いました。それにインドネシアの人たちはご近所との付き合いもまるで家族のようで、毎晩誰かの家に集まって、トランプゲームやマージャンなどをして楽しんだり、談笑したり、悩みを聞いてあげたりしていました。メダンのホームステイ先のお父さんのお兄さんに、「日本でもご近所の人と集まって、談笑したり、トランプしたりするのかい？」と聞かれて、「あんまりしないです」と答えたら驚いていました。

ニマスでは、私は子どもたちと一緒に歌を歌ったり、踊ったり本当に楽しかったです。インドネシアの人びとは物とかが貧しい分、心が大変豊かで毎日を楽しく生きていると思いました。日本は物が豊かな分、心が貧しいと感じました。例えば、日本では自殺する人がたく

さんいます。みんな、せっかく与えられた命をなぜ自ら殺してしまうのでしょうか。私は、今の日本はインドネシアから学ぶことがたくさんあると思います。

私は今回のプロジェクトでたくさんのもので得ることができました。そして、私の今後の進路も見つけることができたと思います。今、私は将来海外の幼稚園のボランティア関係の仕事につきたいと思っています。そのために、今後はこの天理大学で語学を学び、たくさん国際力を育みたいと思います。来年も必ずこのプロジェクトに参加します。本当にありがとうございました。

SENYEN～笑顔～

国際文化・中国3年 福西 穂高



みなさん、11泊12日の「国際参加プロジェクト」、お疲れ様でした。私は今回のこのプロジェクトのおかげで、一生で一回、体験できるかできないかの良い体験をさせていただきました。この活動報告レポートを書いている今でも、飛行機で死ぬ様な思いをしたことをはじめ、現地での色々な思い出がよみがえり、本当に参加してよかったと思える毎日です。特に印象深かったのはフルーツの王様ドリアンです。私の中で「インドネシア＝ドリアン」みたいな感じになっていました。参加したみなさんはどうでしょうか？

ちなみに私は副リーダーという大役を務めさせていただいた訳ですが、参加したメンバーみんなには迷惑ばかりかけ、みんなを引っ張る立場でありながら、逆に助けられすぎだったのでないかなと、振り返ればそんな感じがします。すみませんでした。

私がこのタイトルに「笑顔」とつけた訳は、現地では本当に笑顔に助けられ、改めて笑顔の良さと素晴らしさを感じさせられたからです。インドネシアの子どもたちは、日本人とは何かが違う、文字で表現するのは難しいのですが、目がクリッとしていて、曇りない笑顔という感じで、よく乗り物酔いする私にはもってこいの薬でした。

私が特に印象を受けたのがニアス島で生活している人たちの笑顔でした。決して裕福ではない家庭に、僕たちがホームステイという形で各家庭に訪れました。そこで感じたことは、最近の日本では親が子を、子が親を殺すといった事件をよく耳にしますが、ここインドネシ

アの家庭では親が本当に子を大事にしていましたし、友好的で何より笑顔が絶えなかったです。ふと散歩（Jalan-Jalan）で道を歩けば「ありがと！」とまったく知らない人たちから何度も何度も声をかけていただきました。私の言葉でモアウォの人たちの家庭を表現してみると、「日本の昭和の頃のような、家族みんなですき焼き鍋をつつついてる」という感じを受けました（笑）。

笑顔って自分も良い気持ちになれるし、また相手にも良い感じを与えられます。何より一人一人違う独特の笑顔を持っています。今回のプロジェクトを機に、私は自分だけにしかない笑顔を色んな人にふりまけるような活動を続けていけたら良いなと思いました。

「国際参加プロジェクト」の最終日にこの旅を振り返り、言葉を知っていただけの「一期一会」を体験したと、一緒にホームステイ先で過ごした古橋君と二人で感動しました。そして、この旅が成功したのは、このプロジェクトに参加したみんなが同じ方向を向き、同じ目標をもって頑張ったからだと思います。

本当にみなさん～

「Terima kasih!!!!!!」

インドネシアで学んだこと

国際文化・中国1年 前田 紗知



天理大学に入学を決めた理由のひとつとして、この「国際参加プロジェクト」に参加したいというのがあった。それほど、このプロジェクトに興味があったのだ。しかし、インドネシアに行く前の研修ではあまりメンバーとうまくやっていくことができなかった。だから、「あまり行きたくない」と考えてしまっていた。だが、このプロジェクトを終えた今では、自分の考えがいかに小さなものであったのかということを知っている。そして、心から、このプロジェクトに感謝している。プロジェクトに参加することでたくさんの人と出会い、人の優しさに触れ、多くのことを学んだ。むしろ私のほうが助けられたような気がする。

メダンのホストファミリーとの交流は、改めて異文化理解の難しさを考えるきっかけになった。私のホストファミリーは中国系の人であったが、ファミリーの話では中国系の人と、元々インドネシアに住んでいる人とはあまりいい関係ではないという。昔、この2つの民族の間で大きな事件があり、その時移民してきた多くの中国系の人々はインドネシアに元々住んでいた人に殺されたらしい。ホストファミリーの方にも、もちろんイスラム教やキリスト教のインドネシア人の友たちがいるが、やはりどこか距離をおいてしまうというようなことをいっていた。

そして何よりも心に残っているのは、やはりニアス島での滞在である。まず、ここについての途端、私は田舎が好きなのでうれしかったが、メダンとの違いに驚いた。初日、実をいうと、トイレとお風呂に軽くカルチャーショックを覚えた。しかし、その現実も受け入れてしまえば、何とも思わなくなった。少しでも現地の人と同じように生活をしたいと思ってしまえば、その文化が当たり前であると考えることができる。むしろその違いを面白いと思うようになった。特にニアスのホストファミリーには大変お世話になった。初めは英語が通じないのでどうしようか…と置いていたけれど、むしろそのほうが楽しめた。言葉が通じなくても、心が通じたような気がして嬉しかったのだ。子どもたちとはもう言葉が要らないのではないのかというほど楽しくやっていたことができた。「ついに言葉の壁を乗り越えた！」と思った。

また、子どもたちの笑顔を見ていると、こちらまで心が温かくなってきた。子どもたちだけでなく、島中の人たちから温かいものを感じた。全然違う国からきた私たちに笑顔であいさつをしてくれる。だから、すぐに馴染むことができたのだ。そして、日本は本当に幸せなのだろうかと考えた。近所付き合いが希薄になり、あいさつすらしないこともある。さらに悪いことに、犯罪も増えてきている。シンガポールの空港での待ち時間にゲームやパソコンをしている日本の子どもたちを見た。この子どもたちをみて、私は思った。「私たちは確かに便利なものに囲まれて生活することができる。でもそれだけでは、なぜか幸せだと思えない。日本は発展していく中で何か大切なものを置いてきてしまったのではないだろうか」と。ニアス島で滞在しているときに普通にあいさつをしてくれることが、子どもたちが「お姉ちゃん」と呼んでくれることが、お別れのときにお母さんが泣いてくれたことが、自分の欲しいものを買ったときよりも嬉しかった。本当に幸せだと思った。

このプロジェクトに参加して本当によかった。今まで生きてきた中で、一番充実していたのではないかと思えるほどだ。これからも人の出会いを大切にしていきたい。

「インドネシアが大好きだー！！」

国際文化・英米2年 渡邊 麻子



インドネシアから日本に帰ってきてから、ずっとインドネシアの余韻に浸ってふにゃふにゃしていました。現地で撮った写真をパソコンのスライドショーで毎日眺めては、写真に写る子どもたちの笑顔につられて、こっちまでに思わず笑ってしまいます。何もかも、見るものすべてが新鮮で、今まで生きてきて、これほどまでに好奇心と感受性がむき出しになったことはなかったと思います。

ニアスでは、期待と不安でいっぱいでしたが、お家に行くと、近所の子どもなのか、たくさんの子どもが…そして異国から来た訳のわからない人に興味津々！ものすごく期待に満ちたキラキラした目で私をみつめるのです！力を持った綺麗な瞳。着いた瞬間に外で一緒に遊んでくれました！特に鬼ごっこはせっかくタッチしても、すべての子どもが私を狙ってくるため、2分の1の確率で鬼になるので、かなりハードな遊びでした！私も日本では出したことのないようなキャラに変貌し、フルテンションで遊びました。言葉は大事だけど、心でインドネシアの人の優しさをいっぱい感じることができました。

生活の中での問題点としては言葉もありましたが、やはりトイレと水浴びでした！日本の暖かな水の出るお風呂・きれいなトイレに慣れている私たちには、なかなか、いや、かなりエキサイティングな体験だったと思います。Mandi(水浴び)とおトイレに行く前に、今から格闘でもしにいこうような形相の私を見て、ニアスの子どもたちは奇妙に思ったでしょう。でも、住めば都、最後のほうはへっちゃらになりました。もう私はどんなおトイレでもへっちゃらです。

また、インドネシアではゴミを次から次へと、そこら辺にポイポイ…。私たちがゴミ拾いをしていると、大人の方は「何でそんなことするの？」といった感じでした。でも子どもたちは真似して楽しそうに手伝ってくれました。これからはゴミの問題について伝えていけたらいいなと思います。

思い出すのは人びとの笑顔ばかりですが、ニアスは地震・津波の被害が大きかった島です。まだ学校も橋も家も壊れたままで修理されていないところがたくさんあり、町並みには傷跡がたくさん残っていました。しかし、私が見る限りでは、人びとの顔には災害の悲しみより、

生きる生命力があふれていました。一日一日を笑顔で陽気に過ごす姿…災害があったことを感じさせないニアスの人びとから私が一番教わったのは、「人はどんな境遇にあっても明るく、たくましく、幸せに生きていく力が備わっている」という事だったと思います。

今回のインドネシアでの経験は、私の根暗の性格やちっぽけな価値観を塗りかえてくれたと思います。そして人が好きになりました。大げさだけど、あの子たちの笑顔は、私を「もっと世界を知りたい!」、「世界のために何かをしたい!」という気持ちにさせてくれます!あと一緒に行った皆さん、先生方、本当にありがとうございました!みんなを学校で見かけるとなんだかとっても嬉しくなります!これからもよろしくお願ひします!

最後に、あんな素敵な笑顔が世界中に溢れますように!

海外ボランティアの難しさ

タイ・インドネシア語コース事務助手 丸山 明笑



「国際参加プロジェクト」に参加した学生と私が初めてモアウォ小学校を目にしたのは、8月24日のことだった。小学校の第一印象は「シンプルな学校だな」というものだった。旧校舎と建設中の新校舎と門と小さなグラウンドしかなく、日本の小学校にあるような400m走のできる広いグラウンドや遊具はなかった。しかし、子どもたちは無邪気に遊んでいて、私たちを見つけるとそばに集まってきて、あっという間に囲まれてしまった。ニアス島の小学生は、とてもむじゃきで人懐っこいと思った。日本の小学生なら、遠巻きに見はするが、知らない人に近づいて一緒に遊びはしないだろう。日本の小学生がクールに思えた。

私たちはニアス島のモアウォ小学校の児童と交流した。内容は、折り紙とお絵かきである。私たちは津波によって心に傷をおった子どもたちに笑顔を取り戻して欲しいと思って、交流内容を遊びにした。しかし、子どもたちは交流をする以前から笑っていたし、楽しそうに遊んでいた。私は、子どもたちの笑顔はたくさん見られたが、ボランティアをしたという達成

感はなかった。なぜなら、私が考えているボランティアは、困っている人を助けるものだからだ。私の目には子どもたちが生活に困っているようには見えなかった。

だが、小学生は気にしていないかもしれないが、私は、今後子どもたちが学校で生活していく上で、問題が1つあると感じている。それは、ゴミ問題である。学校の中にも外にも、ペットボトルや飴が入っていた袋のプラスチックのゴミがたくさん捨てられていた。ニアス島の人びとにはゴミをゴミ箱に捨てる習慣はないようで、私がホームステイした家庭には一つもゴミ箱が無かった。ゴミは裏庭に捨てて、燃やしているようだった。式典の後、参加者がゴミをその場に捨てて帰ってしまったので、ホームステイ先の家族に、なぜ掃除をしなかったのかと問うと、詳しくは分からなかったが習慣や文化が違うからだという答えが返ってきた。ニアス島では、ゴミ収集車が走っていないようだったし、ゴミを集めても溜まるだけで処分する方法がないのであろう。早くこのゴミ問題が解消して欲しいと思う。そして、次の「国際参加プロジェクト」でニアス島に行くことになったら、現地でゴミ箱を購入し、小学校の教室とホームステイ先に寄付し、ゴミをゴミ箱に捨てる習慣を持って欲しいと伝えて欲しい。あと、ニアス島で収集したペットボトルをリサイクルするシステムを作れないか検討して頂きたい。この問題は、習慣や文化が違うから良しとされる問題ではなく、これから解決していかなければならないニアス島の問題である。

次回、交流を行なう際は、ゲーム感覚で日本語の勉強をする交流も良いのではないかなと思う。例えば、先生に教えてもらったようで、小学生は全員「ありがとう」を言うことができた。しかし、朝や昼のあいさつとしても「ありがとう」と言い、日本人に対する合言葉のように使われていた。よって、簡単なあいさつを教えてあげるのもいいと思う。

最後に、「国際参加プロジェクト」に参加して、本当にいい体験ができたと思う。普通の旅行では味わえない体験をさせてもらった。この体験を次の活動の参考にできるように形にしていくのが、私たちの仕事ではないかと考えている。

ニラス島、バンダ・アチェでの体験

副学長 大橋 正叔



8月26日から9月1日まで6泊（内機内一泊）7日のインドネシア共和国スマトラ島への校務としての旅は、私にはとても珍しい、しかも、不思議な体験を与えてくれた。

旅の目的は、一昨年12月のインド洋大津波、昨年3月のニラス島大地震で被害を受けたニラス島のモアウォ小学校へ寄贈する新校舎贈呈式への出席と、バンダ・アチェの2大学へ図書とノートパソコンを寄贈するためであった。それぞれに至った経緯はここで改めて説明はしない。ただ、この旅行は地域文化研究センターが企画する「国際参加プロジェクト」とも関わっており、ニラス島やメダンにおける参加学生の活動の様子を見ることも役目に加わってはいた。

モアウォ小学校の贈呈式にはニラスの県知事も臨席され、地元の儀式に則った盛大な歓迎を受けたこと、また、ホームステイしながら学生たちが現地の人たちや小学生と和やかに語り合う姿に感動もしたし、バンダ・アチェでは大津波や地震の被害の大きさに驚嘆するとともに、世界各国からの援助によって復興に向かう町の様子や人びとの姿に少しほっとしたことであった。

さほど海外旅行をしたわけではないが、この度の「珍しさ」、「不思議さ」は初めて感じるものであった。インドネシアが初めて訪れた国であるにもかかわらず、北スマトラの州都で200万人近い人口を抱えた大都市であるメダンにおいてでも、ニラス島の椰子やパイヤ、バナナなどの樹木を茂らせ目に新しい熱帯の風景、イスラム教徒が90%以上を占めるというバンダ・アチェにおいても、見知らぬ外国に来たという感じがしなかったのである。同行者が天理大学の人たちだったからというなら、これまで数回の海外旅行でも同行は仲間たちである。

おそらく、この理由は今回訪れた土地がよそいき姿の観光地ではなく、また、私自身も観光客、即ち、お客様として来たつもりはなかったからであると思うが、それとともに、現地の人びとの生活の様子に何か郷愁のようなものを感じたからだと思う。私たちの生活の原点のような匂いがしたのである。私たちが忘れようとしている、取り巻いている環境の中でごく自然なあたりまえの生活を送るという、人間本来のありようを見たからではなかったかと思う。

2006 夏・ニアスの思い出——若者たちへのオマージュ

国際文化学部アジア学科主任 山本 春樹



ニアスへの支援活動についてはすでいくつかの誌面で報告させてもらっているのですが、ここでは「国際参加プロジェクト」に参加した思い出を書くことにします。

まずは、プロジェクトの参加学生の皆さん、地域文化研究センターの引率スタッフの住原先生、澤山先生、倉光先生、そして広報担当の井上さん、お疲れ様でした。

今だから言いますが、正直なところ、このプロジェクト、とくにニアスの村でのホームステイを無事に終わることができるのか不安でした。事前に数軒の受け入れ家庭を訪ねて、いずれもとてもいい家庭であることは知っていましたが、現実問題としてインドネシアは初めての人たちに村での生活ができるのだろうか、自信はありませんでした。

色々と苦労があったようですね。おそらく風呂トイレ、食事、寝床、といった順に苦労の種があったのだらうと思います。でもみんな明るい顔で毎日を送っておられたのを見て安心しました。多分しんどい事がいっぱいあるだろうに、もうこんな所は嫌だと言い出すことなく頑張っているのに感心しました。体調を崩してホテルに収容された人も何人かいましたがこれはやむをえないことで、翌日にはまた村の家庭に戻っていく姿を、若い人はたいしたものだと思いながら見送りました。

私自身インドネシアの村での生活の経験がありますから、そこにはどんな問題があるかは承知しています。それだけに皆さんが味わった苦労はわかるし、それに耐えた皆さんの努力の立派さもわかります。本当にご苦労様でした。

引率の先生方も大変だったらうと思います。倉光先生は学生さんと同じようにホームステイされて、学生とスタッフの間の橋渡し役を良くお勤めになりました。住原先生と澤山先生はプロジェクト進行の細部にまで気を配り、特に澤山先生が、体調を崩してホテルに来る学生さんのためにお粥を作ったり、かいがいしく世話をされる姿に感心しました。井上さんは本業の記録写真づくりだけでなく学生の世話にも力を注がれ、感謝に堪えません。

夜の帳が下り、無事に終わった一日を振り返って、ホテルの海岸のバルコニーで波音を聞きながらスタッフ一同がおしゃべりを楽しんだことは楽しい思い出です。出発前は鳥インフルエンザのことが気がかりでしたが、インフルエンザならぬ、この世への絶望に取り付かれ

た鶏もいたようです。スタッフのある人たち（あえて名前は伏せますが）が、一羽の鶏が狂乱状態で走り回った挙句に暗闇の中を海に飛び込んで自殺するのを目撃したとのこと。この奇想天外、驚天動地の話については、暑さと疲労からくる視覚変調によるとするものなどの諸説が飛び交いました。果てはアルコール性幻覚のせいというところで落ち着きかけましたが、実の所、この事件は今回のニアスでの最大の謎として残っています。でも、こんな議論に夢中になれたのも、プロジェクトが順調に進んだお陰かもしれません。

ともあれ、皆さんお疲れ様でした。

救援活動に参加して

国際交流部長 谷口 忠三



今回、救援活動を行ったナングル・アチェ・ダルサラム州バンダ・アチェ及びニアス島は、私が30年前の北スマトラ州メタン市に留学中に訪れた懐かしい場所であるが、2004年12月、2005年3月の2度に亘ってこの地を襲った大地震・大津波によって22万余の尊い命が奪われ、大きな被害を受けた。

私たちは「この世は神のからだ」とお教え頂き、天地抱き合わせの神のふところ住まいをさせて頂いているが、この大きな天災は自然環境の破壊等それを粗末にしている人間に対する神の立腹の表われで、この地球に住まわせて頂く私たちがそれに感謝し、いかに大切に生活して行くか、その取り組みが問われている気がする。決して突発的な一過性の出来事と考えるべきではないと思う。

インドネシアは私の大学での専攻学科でもあり、その後長く関わりをもってきた国だけに、今回の救援活動には募金段階から参加させて頂いた。地震の発生からかなりの時間が経過しており、一般市民の関心もかなり薄いと思われたが、予想以上の多くの募金が寄せられ、本学教職員はじめOB・OGの献身的なお力添えによって計画通り救援活動が進められたことに安堵している。

幸い、現地に行くことができ、皆さんの努力が実り、人から忘れ去られた離島に心のこもった校舎が立派に完成したのを目の当たりにできたことはこの上ない喜びであった。本学でも、これまで多くの募金活動が行われ、遠く離れた海外での支援活動にも参加してきたが、募金の成果が形にして確認できたことはなかったと思う。安心して学べる新校舎を前に喜々

として喜ぶ子どもたちの姿が今も目に浮かぶ。一人でも多くの素晴らしい人材が育つことを祈ってやまない。

私たちはニアス島の後、ナングル・ダルサラム・アチェ州バンダ・アチェの2校を訪問し、図書とコンピューターを寄贈させて頂くことができた。同州が受けた被害は想像以上で、数えきれぬ仮設住宅に住むこの人たちが安住できる日はなお遠しと思われた。今後の継続した活動が望まれる。

再訪を期して

地域文化研究センター助教授 澤山 利広



1. 天理の暖かさと天理カラーの校舎

私にとっての第6回「国際参加プロジェクト」のスタートは、2004年12月26日に中国華南の旅先で聞いたスマトラ沖地震津波発生のニュースでした。プロジェクトのターゲットを被災地支援に定め、翌年3月の南アジアでの調査に基づき、スリランカを候補地としました。しかし、本学が長年培ってきたネットワークを有するインドネシアやタイを対象にした方が効果・効率的な活動ができるのではないかと考えていました。そんな矢先に学内教職員と学生の有志による「天理大学ニアス島等復興支援委員会」が立ち上がりました。委員会のメイン活動であるニアス島モアウォ小学校建設のための街頭募金には、趣旨に賛同する学外の方にも加わっていただきました。過去に他の支援活動で何度か街頭募金をしましたが、雑踏の中で虚しくなることも多々ありました。天理駅前での最初の募金の準備をしながら、初めて街頭に立つ学生有志もガッカリするだろうと思っていました。しかし、浄財の額もさることながら、励ましの言葉をかけていただくことも多く、他の街にはない、天理ならではの温かい雰囲気につつまれました。

2006年5月に校舎建設着工の一報が入りました。今回のプロジェクトの事前準備で7月にニアス島を訪れ、建設途中の校舎を見た時には感慨深いものがありました。翌月の校舎完成式典は、村人総出の大きなイベントになりました。天理カラーで塗られた校舎はまさしく天理ネットワークの賜物です。引き続き、その使われ方にも関心を持ち続けたいと思います。

2. 「生きる力」

2003年の米アカデミー賞でオスカーを獲得した『千と千尋の神隠し』は、名前、すなわちアイデンティティの抛り所を奪われた少女が異界で暮らし、成長して現実社会に戻ってく

るファンタジーです。主人公の少女は八百万の神に全身全霊で奉仕する中で、生きとし生けるものとの出会いや触れ合いを通じて「生きる力」を育んでいきます。異界と海外体験を同列で論じるわけではありませんが、青年期の異国での体験は新たな発見に富み、次のステップへの動機付けになることはよくあることです。

インドネシアでの「異界」体験の目玉として企画したのがホームステイです。日本の日常とは異なる生活環境の中で、インドネシア語も十分に話せず、特にニアス島の母語がニアス語と聞けば、不安に駆られるのは当然です。ましてや一家庭に一人で滞在することを余儀なくされると、日本に帰りたいような気持ちになったことも容易に想像できます。しかし、この種の不安は、進学、就職、結婚、引越しなどの旅立ちのステージにはつきもので、乗り越える度に自らの成長を確信できる「良性の不安」であったことに気づかされます。言葉で苦労したものの意外と意思の疎通ができたことに驚き、ホストファミリーとの触れ合いを通じて、改めて家族の大切さが身に沁みたことでしょう。気疲れして体調を崩したり、単調な食事が喉を通らなくても、メダンやニアスを離れる時に惜別の情にほだされたのなら、是非再訪してみてください。ホストファミリーはもちろん、隣近所の人びとや子どもたちが熱烈歓迎してくれるに違いありません。今回の滞在では見えなかったものも見えるようになっているはずです。

「国際参加プロジェクト」に参加したことで皆さんの「生きる力」がバージョンアップし、本学の掲げる「全人類が平和に暮らせるような、全く新しい地球文明の構築」にも思いを馳せてもらえるならうれしい限りです。

最後になりましたが、本プロジェクトにご協力いただいた皆様に深甚のお礼を申し上げます。

改めて、感じて、学んで、そして、考えた 12 日間



地域文化研究センター講師 倉光 ミナ子

「国際参加プロジェクト」を振り返ると、スタッフとしてより、むしろ一参加者として、3つのことが強く印象に残った。1つは初めての経験をしたということである。今年の4月に地域文化研究センターに着任したため、プロジェクトを引率すること自体が初めての経験であった。また、国際協力を1つの研究テーマとしつつも、これま

で研究畑で暮らしてきたので、調査ではなく、実践として発展途上地域に出かけるのも初めてであった。インドネシアではホームステイをし、ファミリーと簡単な会話をするために、辞書をひき、30分もかかるという、生まれて初めて言葉が通じないという経験もした。このようにある意味、学生のように過ごした12日間は未だに整理できないぐらいの衝撃を与え、それによってもたらされたある種の高揚感は今でも続いている。

2つめは学生たちの著しい成長を目の当たりにしたことである。特に、ニアス島でのホームステイでは、ファミリーとの顔合わせを前にして、不安のあまり泣き出す子もいたし、あまりの環境の違いに、一晩の後に、自分はこれ以上ホームステイができないかもしれないと訴える学生もいた。しかし、2日もたつと、学生の多くは生活の差に慣れ、それを楽しめるようになっていた。そして、日本への帰路ではそれぞれに自分が学んだことを誇らしげに報告し、秋学期が始まって、将来は国際協力の仕事につきたいと勉学に励んでいる学生がいる。学生たちから、さもすると、自分が失いたくなくても、年を重ねると共に忘れていく、みずみずしい感受性、情熱、適応力、そして、たくましさを教えてもらった。プロジェクトを終えて、しみじみと思うことは「今年の学生は皆すばらしい」である。

最後に、プロジェクト中に改めて国際協力というものを考えさせられた。インドネシアでは思いもよらないところで、多くの人から様々な期待が寄せられた。北スマトラ大学で新入生の歓迎式を見学していたときには、学生から日本の民族音楽をぜひ教えてほしいと声をかけられた。ニアス島では再建中の博物館において、アメリカ在住の日本人の人類学者から教育プログラムにおいて協力をしてほしいという話を聞いた。ある学生のホームステイ先を訪問したときには、自分が個人的に開いている私的な学校をぜひ見に来てほしいといわれた。これらはすべて何らかの援助の依頼であるといえる。概して、発展途上地域に行く日本人は大なり小なり「開発」への期待を寄せられる。しかし、現実の国際協力は何よりも資金を必要とされるようなことであり、それ以外には特殊な技術を伝えることが望まれる。もちろん、資金を与えるだけ、何かを建設するだけの国際協力は必ずしも現地の利益にはならないが、現地の人びとが期待するのは得てしてそのようなことである。国際協力は実践してなんぼのところがあるが、それは実は難しい。「国際参加プロジェクト」は天理大学の学生であることを除けば、一切の参加資格を問わない。そして、国際協力としてはきわめて短期間である10日～2週間で活動を終える。特別な技術も多大な資金力もない学部生が短期間でインドネシアの人びとのためにできることは何か。地域文化研究センターのインドネシアでの挑戦はまさに始まったばかりである。

ニアス島等復興支援活動を振り返って

天理語学専門学校 22 回生 インドネシア語 菊山 孝昭



私が今回の復興支援活動についての具体的な話を伺いましたのは、2005年11月、ホームカミングデーにてインドネシア語コースの先生方と面談した時でした。2004年12月、翌年3月に発生したスマトラ沖大地震、インド洋大津波で甚大な被害を受けたインドネシアとタイの復興支援の為、インドネシア語コースが推進役となって「ニアス島等復興支援委員会」を発足させたとの話を伺いました。さらに、学長以下教職員、在学生の皆様が全学的に立ち上がっておられる旨ご説明いただき、母校のインドネシア語卒業生としてプロジェクトに参画することの要請を受けました。

インドネシア語部を1949年に卒業した私は、母校で学んだインドネシア語を活かし、マレーやインドネシアでコーヒー・ゴム・オイルパーム等の大規模エステート経営が主要業務であった野村貿易(株)に入社しました。その会社は、戦後の財閥解体を受け、敗戦と同時に資産没収、身柄抑留、かろうじて引き上げた野村東印度殖産(株)OBの方々が、大変なご苦労の末、設立された会社でした。入社7年目の1956年、当時日本との外交関係がなかったインドネシアに赴任し、1980年に帰国しましたが、その間25年に亘り大激動時代のインドネシアにおいて、普通では到底経験できない体当たりでの様々な体験を致しました。振り返れば、今日、私がありますのも、

* 3年間の母校在学中に、およそ宗教心皆無であった私にさえも知らず知らずの内に宗教的情操が備わり、私の中に多少なりとも「天理スピリッツ」が根付いた事

* 学んだインドネシア語を活かし、その言語を駆使して仕事に全力傾注させて頂けた事

* インドネシア滞在を通じ様々な方々に交流をいただき、今なお支えていただいている事
それらの事があってこそであり、感謝致しております。

思えばこれらかけがえのないものは、ひとえに母校天理でインドネシア語を勉強させて頂きました原点から始まっており、いささかでも母校の御恩に報いたいと思ったのがこのプロジェクトに参加した動機です。また、インドネシアの地でその国の空気を吸い、水、食料のおかげを蒙り、そのうえ仕事においても農産物を中心としたビジネスを展開させていただきました。ささやかながらインドネシアへの恩返しにも繋がれば・・・と思いました。プロジェ

クトの成功を願いながら支援活動が続けていくうちに、現地でお世話下さっている方が野村貿易の社員であり、約40年前、一緒に仕事をした仲間であることを知りました。「なんと世界は広いようで狭いのだ」と感じ、神が私にさらなる参加を促し、成功を暗示してくれているかのような想いを抱きました。寒い日も暑い日も、在学生在が自発的かつ継続的な募金活動を行っておられ、その事も私の心を動かしました。これは是が非でもプロジェクトを成功させ、学生の皆様に「どんな事でも真剣に取り組めばできるのだ」という自信と達成感を味わって頂きたいと強く思いました。

このような想いで今回の活動に参加させていただいた私ですが、参加された学生の皆様の素直でまじめな取り組みに大きな拍手を贈りたいと思います。さらにはニアスでのホームステイや小学校寄贈式出席等の貴重な経験を活かされ、思いやりの心、そして「些細な事ではへこたれない」、「辛抱強い」強靱な精神力を養っていただきたいと思っています。

終わりに、今回のプロジェクトの成功を機に、母校が「天理大学ここにあり」の気概を持たれ、ますます発展されることを願っております。

ニアスの地に蒔かれた「絆」の種

高藤洋子



風いだ美しい海、南国の陽を受けて鮮やかな色を放つ花々、青い空に向かって伸びた椰子の樹々…。これら豊かな自然に包まれていると、この地をあのような大地震が襲った等、想像できない程です。しかしそこには現実がありました。栈橋だったのでしょいか、鉄筋が剥き出しになったまま波間に見え隠れする大きく太い四本の柱…。近くには「TSUNAMIの際にはまず高い所に避難すること」等を記した板が貼り出されていました。

宿泊所「Hotel Dian Otomosi」の敷地内には幼稚園があり、朝になると多くの子どもたちの声で賑やかでした。「Selamat pagi、おはよう」と声をかけると、「Selamat pagi !!」元気な声と笑顔が返ってきました。この無邪気な子どもたちがどれほど怖い思い、悲しい思い

をしたでしょうか……。肉親や家など多くを奪っていった大地震、そしてあの巨大津波……。それでも一年半経った今、子どもたちに笑顔が戻っている……。少なくともその事に救われた思いがし、人びとが惨事を受け止め希望を持って力強く前進していることを感じました。

校舎寄贈式や花壇造りの際のモアウォ小学校児童の喜び一杯、嬉しそうな笑顔もまた忘れられません。花壇には色とりどりの花々と一緒に「幸福の木」を植樹しました。学生の皆さんが自らセメントをこねレンガを積み上げ、先生方、ニアスの子どもたち、皆が一緒になって造った花壇です。花壇の土を踏み固めた時の子どもたちの歓声とはしゃぎようは大変なものでした。「これは何の花？」、「何の木を植えたの？」と口々に聞いてきました。「これは幸福の木よ」と答えると、「この木が大きくなったらきっと私たちにも一杯の幸せが来るわね！大切に育てなくちゃ……。」と、空に向かって小さな両手をいっぱい広げ、愛らしい笑顔を見せてくれました。この「幸福の木」、そして綺麗な花々がニアスの子どもたちと共にすくすくと成長してくれる事を心から願っています。

校舎寄贈やこの花壇造りだけでなく、学生の方々の手になる世界で一冊の絵本や折り紙、歌やダンスでの交流、そしてホームステイ先での交流ひとつひとつから新しい「絆」が生まれたように感じました。学生の皆さんの積極的で、ひたむきな姿に心打たれました。

専門分野に止まらず「国際参加プロジェクト」のような活動を実体験し学ぶことができるのは天理大学ならではの特色のひとつだと思います。またこの度プロジェクトに参加させていただいて、天理大学の持つネットワークの強さも感じました。天理大学の多くの先生方、学生の方々、卒業生の方々、現地でご尽力下さった方々、そして天理教団の皆様の熱い思いがこうした形で大きな実を結ばれました事は、本当に素晴らしい事だと実感しました。

今回のプロジェクトにおいて蒔かれた「絆」の種は、これから先、インドネシアひいては全世界で大きく花開き育っていく事と思います。

このプロジェクトで私は思い出だけではない「大切なもの」を得ることができました。インドネシアと日本、それぞれの国の文化、伝統や社会の仕組みに違いがある中で、共に協力し合い活動することの尊さを学びました。これらの活動や現地の方々との交流こそ「絆」であり、希望、平和の象徴のように感じました。

最後になりましたが、このプロジェクトにご一緒させていただけた事に感謝致しますと共に天理大学のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

My Opinion about Tenri University

Medan, Oct-30-2006

Hendri N.Kuroiwa



First of all, I want to say thank you so much to all people who have contributed in supporting Indonesia by giving a very useful donation to develop the education facility in Nias Island.

My opinion of this donation:

1. My Viewpoint:

This is a very good decision to give all donations directly to the place and people who need it and the accomplishment of this donation can be directly useful for the recipients.

2. My Admiration:

Peoples from Tenri University come to Nias Island to give the donation directly and mixed together with local people and know about each other. I am sure that we can keep this relationship and can create a better future for Tenri University and Nias Island together.

3. My suggestion:

Considering that Nias is one of the places which has poorest education system and due to a very low standard of education system in Nias Island, I think it would be really good if we can improve this program by:

- Providing scholarships to study in Tenri University for one or more qualified high school students who studied at school built by Tenri University. And the scholarship qualification is a student who has really good academic performance and activity, and they must come from the poor family and also with requirement that after they graduate from Tenri University, they must come back to Nias and become a teacher in school of that Island.
- Approaching local government in order to have a permission to employ a student who has graduated from Tenri University to teach in this school. Therefore, Tenri University will be known among people in Nias Island and Indonesia.

That is all my opinion, I hope it can be useful for this program and I apologize if there is a mistake in my opinion or words.



*ハディジャ・梅田さんとヘンドリ・黒岩さんご夫妻には、メダン市での活動では全般にあたり、とてもお世話になりました。参加学生・スタッフを代表して、深く御礼申し上げます。

私が選んだ写真

広報部 井上久光

地域文化研究センター「国際参加プロジェクト」スタッフの教員・学生の方々より、撮影した写真の中から「1枚」選ぶように言われたのですが、絞りきれないとお伝えし、「5枚くらい」に譲歩してもらったのですが、撮影した写真は膨大で…。

ということで、今回は勝手に写真点数を増やしてしまいました。すみません。

MEDAN



スンガイ・アイル・ヒドゥップ孤児院
交流後の記念撮影



インドネシア最大のオーパル
コーヒー工場
豆を選別する女性



ムルパティ航空機で
ニアスに到着！



辛くて美味な、ナシ・フンクス
(ご飯を葉っぱで包んだもの)



NIAS

ホテル・オトモシ
からの風景



校舎とともに贈呈したイス



花壇完成！



贈呈した校舎
時間が無く、完成後に
撮れなかったのが残念

ACEH



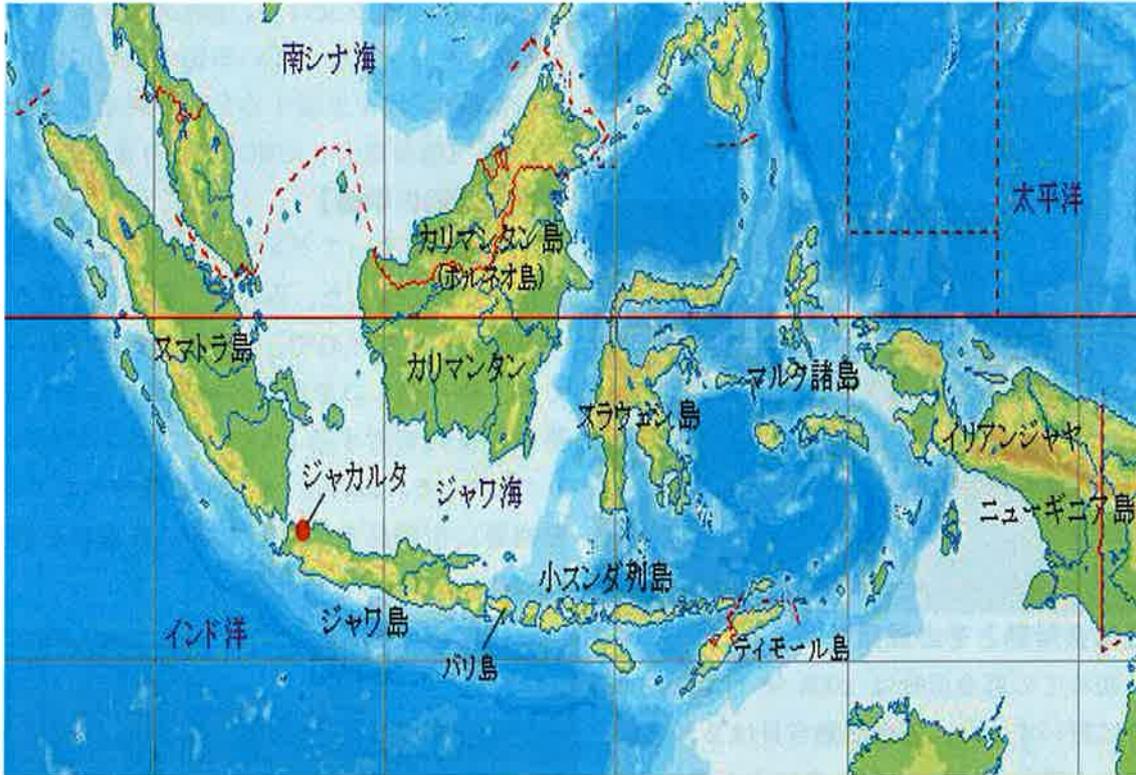
荘厳な、
バイトゥルラフマン・モスク



海辺に建設中の
津波の高さを示す塔

第Ⅲ部
資料編

インドネシア概要



正式な国名はインドネシア共和国、首都はジャカルタである。人口は約2億4000万、国土面積は191万9440k㎡で、1万7500以上の島からなる。国語はインドネシア語で、その他、ジャワ語、スンダ語などの言語が地方語として使われている。通貨単位はルピアである。気候は赤道直下の雨林気候とその南北に広がるモンスーン気候に区分されるが、一般的には常時高温で全地域平均気温は27～28℃くらいである。雨量はモンスーン気候の地域では雨季と乾季で差が激しい。しかし、スンダ列島の東部は乾季が長く雨量は少ないので、雨季・乾季の中間に赤道前線の接近の程度により早魃になることもある。しかし、全体的には熱帯多雨の特質が明らかである。宗教は主にイスラム教であるが、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教も信仰されている。地方によっては、土地、樹木、山、海、岩などあらゆる場に存在する諸精霊、秀でた人物や物体に宿る超越的力、神格化した死者霊などを信仰しているところもある。インドネシアは西部、中部、東部の3つの時間帯がある。日本との時差は、西部は2時間遅れ、中部は1時間遅れ、東部は時差がない。



インドネシアの国旗は左の図のように赤と白の国旗であるが、これは勇氣と真実を象徴している。国是として定められているのは神への信仰、人道主義、民族主義、民主主義、社会主義の5原則で、国歌を「インドネシア・ラヤ」、標語は多様性の統一を意味する「ビネカ・トゥンガル・イカ」としている。

募金活動

2004年12月のスマトラ島沖地震によるインド洋大津波発生を受けて、国際文化学部のタイ学科とインドネシア学科の学生たちと教員は「自分たちが関わっている国のために何かできないか」と話し合い、その結果「インド洋大津波被災地を支援する会」を発足させました。これがのちに、全学あげての「ニアス島等復興支援委員会」の原点となりました。



【募金活動の準備】

放課後に集まってダンボールを使って、募金箱を作成しました。みんな、募金箱を作るのが初めてでしたので、お金の入れ口はあっても、取り出し口を作るのを忘れてしまい、募金の後に苦勞するというハプニングもありました。それ以外に、立て看板を作ったり、警察署に街頭募金の許可を求める書類を提出したりしました。

【募金活動とその成果】

初めての募金活動は2005年1月25・26日に行いました。募金活動当日は2日とも、学生と教員を合わせて30名以上が参加しました。津波発生から時間がそれほど経過していないこともあり、この2日間で約50万円と街頭募金活動の中での最高額が集まりました。その後、話し合いの結果、そのお金は日本国内のNGO組織を通して被災地に送金しました。



その後、復興支援に向けてさらに活動を継続するために、2005年10月6日に「ニアス島等復興支援委員会」を正式に発足させ、法人の職員、教員、OG・OBの方々に寄附を募るとともに月に1回天理教の月次祭の日に天理駅前などで募金活動を合計で9回行いました。

その結果、2006年11月の時点で、募金総額は10,170,694円となっています。しかし、募金活動を終了した現在でも、心あたかな人びとからの募金が集まっています。

モアウォ小学校建設着工の経緯

2006年5月24日に行われた第5回「ニアス島等復興支援委員会」の会議で、インドネシアから送られてきた工事見積もり表と工程表、そして、ニアス県教育局との合意文書(MOU)の検討が行われました。建設される校舎の耐震性の責任の所在や保障期間の確認等がなされた後、計画通りに実行に移されることが承認されました。



↑土台が完成したところ。

←地鎮祭のようなことを行っているところ。

この過程をうけて、6月1日にニアス県教育局との間に合意書が作成されました。そして、6月3日には建設会社ディニ・ウタマ・カルヤ社(CV.Dini Utama Karya)との契約書に署名がなされました。これにより、工事の頭金がメダンのプロジェクト用の銀行口座に送金され、6月5日に新校舎は着工の運びになりました。そして、8月末に「国際参加プロジェクト」のメンバーがニアス島モアウォ小学校に到着したときには、校舎の完成に向けて、急ピッチで建設が進められていきました。8月27日には、プロジェクト参加者が校舎の仕上げ作業としてペンキ塗りを行い、プレゼントする新しい教室に入れる椅子と机、一つ一つに「UNIV.TENRI」の文字を入れました。こうして、校舎は無事に完成し、8月29日に式を迎えることができました。



小学生との絵の交換



【絵の受け取り】

「国際参加プロジェクト」の前に、インドネシアの地震被害を受けた子どもたちを励ますため、天理小学校、桜井市立織田小学校の生徒たちが絵を描いてくれました。私たちはそれらをそれぞれの小学校に受け取りに行きました。「小学生とは思えない芸術的な作品で、驚きました。」(天理小で受け取った佐藤さん談)

【絵の贈呈】 2つの小学校から受け取った絵の一部をインドネシアへ運んでいき、メダンの孤児院とニアス島のモアウォ小学校に贈呈しました。活動報告に記した通り、それぞれにお礼の絵を描いてもらいました。



【絵の報告会】

帰国後、天理小学校と桜井市立織田小学校に報告に行きました。

天理小学校へは、10月25日(水)に、青木、中村、田中、柴本の4人が訪問しました。講堂に1年生から6年生まで全校生徒が集まって、私たちが歓迎してくれました。報告会では、まず多くの小学生を目の前に、スライドを使い、インドネシアの地理や地震の被害などを説明しました。そして、描いてくれた絵を渡したことで、お礼にインドネシアの子どもたちが絵を描いてくれたことを報告しました。子どもたちはみんな真剣に聞いてくれて、絵の贈呈式の様子を見ているときは、すごく誇らしげで嬉しそうでした。

織田小学校へは11月16日(木)に岸田、池崎、内野の3人が行きました。織田小学校では5年生と6年生に報告を行いました。みんな、インドネシアについて勉強をしていたので、たくさん質問がでました。後日、織田小先生からは子どもたちのお礼の手紙をまとめた文集を郵送で受け取りました。

ありがとうございました。



インドネシア語講座

【挨拶】

Selamat pagi おはよう
Selamat siang こんにちは
Selamat sore こんにちは
Selamat malamこんばんは
Apa kabar? お元気ですか?
Terimaka kasih ありがとう
Sama-sama どういたしまして
Maaf ごめんなさい
Sampai jumpa また会いましょう
Daag バイバイ
Mau ke mana? どこに行くの?
Saya mau ke~ ~へいく
jalan-jalan 散歩
Permisi すみません

【家族】

Bapak お父さん
Ibu お母さん
Kakek おじいさん
Nenek おばあさん
Mas 兄ちゃん
Kakak 姉ちゃん

【呼びかけ】

Ini apa? これは何ですか?
Ayo! さあ!
Kenapa? どうして?
Tolong! たすけて
Jangan! だめ!
Tunggu! 待って!
Boleh ~してよい

【自己紹介】

Nama saya~ 私の名前は~です。
Nama anda siapa?あなたの名前?
Umurnya berapa? 何歳ですか?

Umur saya~tahun ~歳です。

Anda berasal dari mana? 出身は?

【食事】

Sudah makan? もう食べた?
Sudah はい。食べました。
Belum まだです。
Lapar お腹がすいた。
Sudah kenyang お腹いっぱい
Berapa? いくら?
enak おいしい
suka 好き
manis 甘い、かわいい
pedas 辛い
panas 熱い
besar 大きい
kecil 小さい
banyak たくさん
【その他】
nyanyi 歌う
masak 料理する
cantik きれい
W.C. トイレ
mandi 水浴び



←ホームステイの
必需品：
『指差し会話帳』
ぼろぼろです。

「心の友」との出会い

メダンの孤児院では、子どもたちが日本の歌で歓迎してくれました。私たちに大きな感動を与えたこの歌は日本に帰って調べてみると、五輪真弓さんの「心の友」という曲でした。これはインドネシアではとても有名で、ホームステイ先でも歌われました。

心の友（作詞・作曲：五輪真弓）

あなたから苦しみを奪えたその時
私にも生きてゆく勇気が湧いてくる
あなたと出会うまでは孤独なさすらい人
その手のぬくもりを感じさせて

愛はいつもララバイ
旅に疲れたとき
ただ心の友と
私を呼んで

信じあう心さえどこかに忘れて
人はなぜ過ぎた日の幸せを追いかける
静かにまぶた閉じて心のドアを開き
私をつかんだら涙拭いて

愛はいつもララバイ
あなたが弱いとき
ただ心の友と
私を呼んで

愛はいつもララバイ
旅に疲れたとき
ただ心の友と
私を呼んで

絵本『よろこびの種』

8月28日の完成式で、モアウォ小学校の子どもたちに送られた絵本は、本文を地域文化研究センターの事務助手である吉岡健治さんが担当し、絵は本プロジェクト参加学生の佐藤宮子さんのお姉さんが作成したものです。吉岡さんには事前・帰国後の研修中に参加学生がとてもお世話になりました。ここに、絵本の内容と吉岡さん本人による絵本作成にまつわる感想を載せたいと思います。

'benih yang bahagia'
'よろこびの種'

はじめに、第6回「国際参加プロジェクト」が無事終了しましたこと、心からお喜び申し上げます。また、このような機会にめぐりあえて、大変、感謝いたしております。

今回の「国際参加プロジェクト」に際して、絵本作成を通じお力添えさせていただいた理由について簡単に述べさせていただきたいと思います。余談になるのですが、インドネシアという国名を耳にしますと、一昨年、昨年のような地震・津波といった天災ばかりにとらわれがちですが、過去にはオランダによる植民地化、太平洋戦争下での惨禍、現代においてはインドネシア国内での内紛と、人災という困難にも直面した国であると思います。人災に関しては、太平洋戦争下での日本の行いが含まれていることが残念でなりません。私の浅知恵ゆえの勝手な思いですが、インドネシアの歴史は過去から現在に至るまで苦難な道のりの連続だったのではないのでしょうか。（拙作の文中にある「種」は、嵐という天災だけで流れ出たのではなかったのかもしれませんが。）

その中で、インドネシアという国に思いをめぐらせた時、何かしら私に協力できることがあるのではないかと思ひ至り、今回のプロジェクトを知り絵本の作成へとつながったわけです。

思い返せば、絵本の作成に追われていた2006年度の夏のあわただしさが懐かしく感じられます。今からさかのぼり7月上旬のことだったと思います。漠然と国際協力への思いを抱いたまま日々を過していました。そんなある日、私は床に入り瞼を閉じたのですが、数時間としない内に目が覚め、寝付けなかったことを記憶しています。その時、なぜか分からないのですが今回作成した絵本のストーリーが頭の中にぼんやりと浮かんで来て、そのことを忘れない内に紙に書き留めておくことに必死になったことを今でもはっきりと覚えています。翌日、寝不足で大変だったことも良い経験だと思ひます。

また、作成段階の原文の翻訳について少し述べてみたいと思います。私はインドネシア語というものが全く出来ないため、日本語からインドネシア語に翻訳できる方を探す必要がありました。ここでも何かしらの力が働いたのでしょうか、快く引き受けていただけたインドネシア人留学生イクバル君とメイディさんに出会い、翻訳をお願いすることになりました。本当に幸運な出会いだったと思ひます。しかし、翻訳の道のりは平坦ではなく漢

字の読みに2人の留学生は困惑し、片言の日本語で留学生2人から質問を受けるのですが、逆に私が戸惑う始末で、共通理解できる言語の大切さを痛感したものです。その後、何とか翻訳し終えるまでこぎつけたのは、留学生2人の日々の日本語学習の成果だと思えます。最終的にはプロジェクト参加学生の皆さんが離日する前に絵本を渡さなければならず、取り急ぎ製本し、絵本の作成と離日前の日程調整に奔走したことが挙げられるだろうと思えます。

最後に、第6回「国際参加プロジェクト」に参加された学生の皆様へ「お疲れ様でした。」今回のプロジェクトをきっかけに、今後も内なる思いを胸に世界に羽ばたける日を祈っています。

インドネシアへの贈り物として、学生の皆さんに届けていただいた絵本の一部を掲載させていただきます。（地域研究文化センター事務助手 吉岡 健治氏寄稿）



第6回「国際参加プロジェクト」に関する新聞記事

本年度は「ニアス島等復興支援委員会」の活動と平行して、「国際参加プロジェクト」が実施されたことを背景に、様々なメディアに「国際参加プロジェクト」に関する記事が紹介されました。また、8月のインドネシアにおける活動後には、現地の新聞でも記事として取り上げられたと聞いています。ここに、12月20日現在における、「ニアス島等復興支援委員会」の活動および、本プロジェクトに関する新聞記事等の一覧表と記事の一部を紹介します。

【新聞記事等の一覧表】

No.	タイトル	掲載紙	掲載日
1	津波被災地助けよう	奈良新聞	7月17日
2	スマトラ沖地震「忘れられた被災地」ニアス島 小学校舎完成へ	毎日新聞	7月20日
3	ニアス島復興 天理大支援	読売新聞	7月20日
4	天理大、校舎を再建	産経新聞	8月8日
5	被災地に小学校完成	奈良新聞	9月8日
6	被災地の校舎再建	毎日新聞	9月8日
7	インドネシア復興支援	読売新聞	9月23日
8	国際協力の輪広げたい	奈良新聞	10月13日
9	海を越えた絵の交換	毎日新聞	10月29日
10	海を越えた絵の交換	奈良新聞	10月31日
11	忘れられた被災地へ真心を インドネシアのニアス島で復興支援活動	天理大学学報	11月1日
12	フィリピンやインドネシアから海を越えて絵の 交換	奈良新聞	11月20日
13	フィリピンやインドネシアから海を越えて絵の 交換	奈良リビング	12月1日号
14	Opinion Message of 'devotion to serving others' (橋本武人学長)	The Asahi Shimbun	12月4日
15	被災地から「ありがとう」	天理時報	12月10日
16	海を越えた絵の交換	天理大学広報	12月15日

スマトラ沖地震「忘れられた被災地」ニアス島

小学校舎完成へ



地震と津波で校舎が全壊し、テントで授業を続ける
インドネシア・ニアス島の子どもら＝天理大提供

天理大が再建支援

04年のスマトラ沖地震による津波と05年3月の地震で被災したインドネシア・ニアス島で、天理大（天理市）が再建支援をした小学校の校舎が間もなく完成する。8月の完成式には、学生17人と教授らも参加。松尾勇・国際文化学部長は「被災地の痛みを我が心の痛みとして取り組み、その心を届けたい」と話す。

ニアス島では、約2000ある小学校がほぼ全壊。天理大では、現地視察した教授を中心に「ニアス島等復興支援委員会」を設立、募金を集めた。ニアス島グナンシトリの公立モアオ小で校舎再建支援することを決め、寄付金から500万円を充

て、今年5月に着工。鉄筋平屋建てで、教室が三つある校舎は、壁にレンガを積む工事まで進んでいる。

学生らは、8月20～31日に現地を訪問。校舎引き渡しに先立ち、花壇などの整備を手伝う。その後、スマトラ島のアチェにある2大学の学生らも訪問。津波で図書が流失し、授業がままならないと聞いて、図書購入費用を贈る。

毎日新聞 7/20

少子化が進み、大学・短大の志願者数と入学者数が一致する「全入時代」が目前に迫る中、社会のニーズに合った特色ある教育内容を模索する大学が増えている。県内の大学も、最先端の研究、海外での交流や活動、ユニークな教育など、多岐にわたる取り組みが行われている。その中から、▽中核的研究拠点(COE)プログラムに採択された奈良女子大(奈良市)の古代都市研究▽学生も参加した天理大(天理市)のインドネシア復興支援活動▽スポーツと看護の連携を目指して来朝奈良市に開学予定の関西科学大(仮称)——について紹介する。

天理大



天理大(天理市)は、2004年のインドネシア地震、05年のスマトラ沖地震で大倉在籍生を愛したインドネシア・ニース島などの復興支援活動に取り組んでいる。8月には、同島のモアウオ小学校で進めていた校舎の再建計画が完成し、同大から約

30人が現地を訪問、同大の「国際参加プロジェクト」の一環で学生も参加し、校舎のペンキ塗

子どもたちに折紙を指導する天理大の学生(インドネシア・ニース島で)

りや花壇作りを手伝ったり、子どもたちに折り紙を教えたりして、交流を深めた。
ニース島は人口約60万人。インドネシア東部のスマトラ沖地震で多くの死者を出し、島内の学校もほとんどが倒壊した。しかしその被害の大半はともかわらぬ。日本からの人的支援は少ないが、天理大は教員らが現地を視察した上で、昨年10月に「ニース島復興支援委員会」(委員長＝松尾勇・国際文化学部助産)を設立、約100万円を募集し、約500万円を同島の校舎再建にあて、5月から仕事を始めた。

現地では、小学校の児童らが踊りを歓迎。同大から黒や白・イス、児童約500人の天理チーム入り「ジャシー」学生

手りの様本、日本の小学生が描いた絵を添贈られ、大樹正



天理大の支援で再建された校舎の前で、歓迎の踊りを披露する子どもたち(インドネシア・ニース島で)。一写真員はいずれも同大提供

インドネシア 復興支援活動

役立つことを願っています」とあいさつした。
これに対し、ニース島の知事「教育施設の再建を街頭と将来の建設の礎、天理大の支援に心より礼申しあげると謝辞を述べ、同島の児童からもしつかり強めます。なぞ、感謝の言葉を贈りました。」
このほか同国アチェのシヤ・クラマテル・ラニリ国立イスラム高等学院、流失した

図書やパソコンを寄贈、学生たちも同国の北スマトラを訪問し、インドネシアの民族舞踊を教えるも「一方、ソーラン舞を披露する姿を見て、友好を築いた。」
現地訪問をまえ、今秋には「復興支援委員会」の山本春樹教授は「私たちの支援規模は小さいが、地域のみなさんに当り立ち立ててもらえる実感でき、よかったと思う」とする一方、「復興は体ごとくはまだまだ途上で、継続した支援が大切な段階。今後も教育現場、現地の支援を続けていきたい」と話している。

読売新聞 9/23

編集後記

9月25日に学生たちがそれぞれの感想文を提出してから、約6ヶ月…ようやく発行にこぎつけることができました。6月の役割分担の折に、じゃんけんやくじ引きの結果で、なんとなく「記録担当」を引き受けた8名はまさかこのように忙しい秋学期を送ることになろうとは露にも想像できなかつたと思います。運がよいのか、悪いのか、1回生と2回生を中心とした記録のメンバーはインドネシアの活動中から様々な写真を撮影し、帰国後はそれぞれに忙しい中、Microsoft Wordに取り組み、皆で仲良く、協力し合って、大変な編集作業を乗り越えてくれました。その結果、地域文化研究センターのスタッフも驚くぐらいに、充実した内容の報告書ができあがりました。記録の皆様、本当にご苦労様でした。また、今年は大学をあげてのニアス島等復興支援活動の一部として、プロジェクトを実施いたしました縁から、忙しい中、たくさんの方々から報告書へご寄稿をいただきました。参加学生および関係者スタッフを代表して、深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。(地域文化研究センター・倉光ミナ子)



記録係から一言

みなみ：編集長、サイコーです！とても良い報告書ができました。良かったです！（柴本）

カサイ君：皆ありがとうございます。楽しく報告書を作れたから最高でした。（葛西）

はっちゃん：おつかれー！ほんまに記録係でよかったよー！いい思い出ありがと♥（田中）

きっしー：みんなお疲れ様でした！そして本当にありがとう！！最高でした！（岸田）

みゃーこ：記録のみんなに出会えてよかった！本当にありがとう。（佐藤）

ユータロ：みんなありがとう！記録がこのメンバーでよかった☆みんな好きやで！（中村）

タクミ：来年も参加させていただきます☆★ほんとにありがとうございました！！（中山）

なべ：倉光先生と記録のみんなに出会うために天理大学に来たのかも…です！万歳！（渡邊）

天理大学「国際参加プロジェクト」
『第6回「国際参加プロジェクト」報告書』

発行：2007年4月2日発行
編集：第6回「国際参加プロジェクト」参加者
監修：倉光 ミナ子
発行所：天理大学地域文化研究センター
〒632-8510 天理市杣之内町 1050
Tel/Fax：0743 (63) 9007

印刷所：天理時報社



ICRS
Tenri Univ.